
カルヴィナ・クエスト

3-6のトトロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カルヴィナ・クエスト

【Nコード】

N3269T

【作者名】

3・6のトトロ

【あらすじ】

ポケモンとスーパーロボット大戦が、まさかのコラボ！？ ……
させてみた。

『E エブリスタ』と言うサ

イトにて、

強制非表示になってしまった作品です。

それでも書きたかったので、こちらに少しずつリメイクして転載（

？）させていただきます。

）手短なあらすじ。

スパロボとポケモンが、何故かごっちゃになってしまった奇妙過ぎる世界のお話。でも、ストーリーはスパロボに寄りがち。中盤あたりで一気にスパロボムードになっていきます。

なお、作者の考えたオリキャラとかは一切出しません。（オリジナリティーがないと言わないでね（迫真））

～登場人物紹介～

『スーパーロボット大戦』と『ポケットモンスター』のコラボ二次創作です。

なんで、スパロボとポケモンという何の繋がりもないものをコラボさせたのかは……

自分の好きなゲームだから。

そう。ただそれだけ。

いきあたりばつたりな小説です（ごめんなさい）。

登場人物紹介

作者が勝手に設定した、理不尽なオリジナル設定があるので、ご了承ください。

カルヴィナ・クーランジュ【人間】

本作品の主人公。元連合軍の指揮官クラスのパイロットであったが、軍を引退し、ポケモントレーナーとなる。

その後、『例のあの事故』に巻き込まれ、現在に至る。

攻撃的な喋り方をするので、多少冷たい印象を受けやすいが、以外と面倒見が良い。実は、ほのぼのアニメオタク。フェステニア・ミューズ（テニア）

【擬人化】

ヒトカゲが擬人化した少女。

カルヴィナのパートナーの一人。

明るく、力強い性格で、頼りになるアタッカー。しかし、以外に涙もろかったり、お化けを怖がったりと、女の子らしいところも垣間見ることができる。大食い。

何らかの鍵を握る、主要人物。

カティア・グリニャール（カティア）

【 【擬人化】 】

フシギダネの擬人化。

三匹のリーダー格で、常に丁寧語を使い、礼儀正しくふるまう。が、彼女を怒らせようものなら、問答無用で叩き潰されてしまうことだろう。

テニアと同じく、何らかの特殊能力を秘めている。

メルア・メルナ・メイア（メルア）

【 【擬人化】 】

ゼニガメの擬人化。

原作スパロボJでは、ハッキリ言って使えないキャラである。

だが、戦いのセンスはある。

気弱で、お人よしに見える彼女だが、三匹の中では精神的に一番タフ。

大の甘いもの好き。

まだ登場しますが、今はこのくらいにして、始まります。

第1話「旅立ちと出会い」（前書き）

カルヴィナ「悪夢にうなされて、私は飛び起きる……」

この小説では、

次の町に到着した時点で、次話となります。

第1話だけは、世界観の解説を兼ねているため、文字がギッシリですが、つぎの話からは解消されます。

第1話「旅立ちと出会い」

悪夢にうなされて、私は飛び起きる。

周囲の様子から、ここが病院であることを思い出した。

また……

また、あの夢を見てしまった…。

苦い思いが込み上げる……

- 病院一室 -

テーブル越しに、女性と男性が向き合って座っている。

女性のほうは、歳は20代くらいであろうか。 肌にはツヤがあり、
若々しい体つきをしている。

……だが、彼女からは何か欠けている感じがする……。 あえて言
うならば、生きる気力……であろうか。

その女性が先に、話しを切り出した。

カルヴィナ「いつも訪ねて来る助手さんかと思ったら、今日は違う
のね。 あなたが、オーキド博士さん？」

オーキド「いかにも。 私がオーキドです。 今日はあるお願いが
あって、訪ねたのじゃが……。」

これに答えた男性は、結構な歳に見える。 そのせいなのか、威厳の
ようなものが感じられた。

カルヴィナ「……わかってるわ。 私にポケモン図鑑を作成しろとい
うんでしょっ？」

あんたの助手から何度も聞いたわ。

…悪いけど、お断りよ、そんな面倒なこと。」

オーキド「まあ、そんなこと言わないで…。 貴女の活躍ぶりは、よく聞いておりますぞ。」

カルヴィナ「その話はやめて。…昔のこと、思い出したくないのよ…。 それより、何故あなたが私を知っているの？ 私は記録では、死んだことになっているはずだけど。」

オーキド「いやいや、我が研究所の情報収集能力をなめないでいただきたい。」

貴女は以前、連合軍に所属していた。 先のDC戦争において、戦闘機というひ弱な武装にも関わらず、優れた戦果を出し、部隊内では『ホワイト・リンクス』という異名で呼ばれ、一目おかれていたとか。

しかし、事故に見舞われ負傷。 軍を引退し、ポケモントレーナーとしてシルフカンパニーの姉妹社のアシユアリー・クロイツェルの社員に。 しかし半年前、例の事故で……。

連合軍からの追求を避けるため、あえて『死んだ』ということにしたよのだが…。」

…ここまで聞き、一瞬カルヴィナはオーキドに殺意が芽生えた。

カルヴィナ「…私は、昔の話はやめてと言ったのよ…？ それとも、あんたがわざと言っているなら、今すぐここであんたを血だるまにしてやるわ！！」

カルヴィナはオーキドを鬼の形相で睨みつけ、怒鳴った。

オーキド「い、いや、とんだご無礼を。 気を悪くされたなら謝ります。 ポケモン凶鑑の件、なんとしても貴女にお願いしたいのです。 貴女ほどの適任者は他におりません。」

カルヴィナは落ち着きを取り戻し、悲しいような、悔しいような目をして。

しかし、冷静に話した。

カルヴィナ「悪いけど……。 私はもう、トレーナーには戻れないの。 例のあの事故のせいで、感覚に異常がでてね…。 軍にいた時のように、戦闘機に乗るところか、ポケモンバトルだって出来ない……。 もう、バトルを肌で感じとるのが難しいの。」

うまく状況を把握して、ポケモンに指示が出せないのよ。 リハビリには、何年もかかる。」

カルヴィナは、切なそうに言った。

オーキド「……それでしたら、我が研究所で研究している、三体の

ポケモンを差し上げますぞ。 あのポケモンたちは特殊でしてな。」

カルヴィナ「…特殊？」

オーキド「ええ。 貴女はポケモンに指示を出すのが難しくなってしまうのですよね？ でも、ポケモンと会話できるとしたら…通じ合えるとしたら、どうです？」

カルヴィナ「馬鹿な。 そんなことが…」

カルヴィナは、有り得ない事だと思った。

オーキド「不可能だと思いますか？ …私はそのポケモンたちを全力をそそいで研究した。 それこそ十年かけました…。」

そのポケモン達を、貴女に差し上げましょう。」

カルヴィナは唖然とした。

なんで、こいつはここまで私にこだわるのだろう？ 何故、私にここまでしてくれるのだろう？
そう思った。

カルヴィナ「なんでそこまでして…」

オーキド「言ったはずですよ。私は貴女の手を必要としていると。

む？ それとも報酬金の件ですか？ それだったら、ポーナスも込みで……。

これくらいだったら、お出しできますぞ？」チラッ

オーキドは、電卓を叩き、カルヴィナに見せた。

カルヴィナ「……」

オーキド「ご安心を。もちろん、この額は税抜きですよ。」

カルヴィナ「……もういいわ。

そこまで言うのなら私は、あんたと契約する。言っておくけど、余り期待なんてしないでよ。私はもう以前のような私じゃないからね。

……で、私はいつ研究所へ行けばいいの？」

……

……

……

……
翌日、マサラタウンの研究所の前に、
ロングヘアの女性が立っていた。

相変わらず、彼女の面倒臭そうな感じは変わらない。

「カルヴィナ」…ふう、まさかいきなり翌日に来ることになるとはね。

「オーキド」おお！ クーランジュさん、来ていただいてありがとうございます、
！ さ、中へ。」

「カルヴィナ」お邪魔するわ。で、その三体の特殊なポケモンって？」

「オーキド」おおそうじゃった！ でてこいお前たち！」

オーキド博士は三つのモンスターボールを投げた。

「ヒトカゲ？」ふう、やっと出られた！」

「カルヴィナ」!?!」

カルヴィナは驚きのあまり、目を見開いた。

そのポケモンは、ヒトカゲと人間の少女を足して、2で割ったような姿だったのである。 さしずめ、擬人化ポケモンとも言ったところか。

後の二匹も、まるで擬人化したフシギダネとゼニガメだった。

オーキド「どうですじゃ、驚きましたかね？」

カルヴィナ「…ええ。インパクトはあるわね。ほとんど人間じゃないの。

…もっとも、別に私は聞いても擬人化の原理なんかわかんないだろうし、深くは聞かないけど…。 しかも三匹とも なのね…」

オーキド「気に入っていただけましたかな？ この三匹、ニックネームは、ヒトカゲが『テニア』、フシギダネが『カティア』、ゼニガメが『メルア』といいます。ワシの研究成果で、人語で会話ができますから、今のクーランジュ殿でも満足に扱えますぞ。」

カティア「博士、この方は…？」

オーキド「クーランジュ殿。 今日からお前たちの主人となる。 しっかりいうこときくのじゃぞ。」

テニア「よろしくね！ クーランジュ！」

ヒトカゲ少女が挨拶をした。

カティア「よろしくお願ひします。 ほら、メルア、あなたも！」

フシギダネの少女が、ゼニガメの少女を促した。

メルア「あ、ええと…よろしくお願ひします……」

メルアというゼニガメは、どうやらかなり気弱のようだ。
それが、カルヴィナのカンに障った。

カルヴィナ「ふん…。 ま、いいわ。 私のパートナーになるなら、
しっかりついてきなさい。 怯えたり泣いたりしたら、すぐ捨てる
わよ。」

その発言に、三匹は一瞬動揺をみせたが、直ぐにテニアが返事をし
た。

テニア「…う、うん……。」

カルヴィナ「よろしい。では、出発しましょうか？ オーキド博士、行くわ。」

オーキド「うむ……。頼みましたぞ、クーランジュ殿……。」

気のせいか、オーキドは少し瞳が潤んでいるようだった

- 1 番道路 -

カルヴィナは、颯爽と草むらをすり抜けてトキワを目指す。

それを後から三匹が着いていく。

テニア「ま、待ってよクーランジュ。」

カルヴィナ「…ふう。さすがに田舎ね。この辺はトレーナーもいないわ。」

テニア「そうだね。アタシもここにはよく来るけど、いつもトレーナーはいないなあ。」

メルア「過疎地域ですよね。」

カルヴィナ「ま、こんなネタのない場所、さつさと抜けましょ。
長居は無用。」

カルヴィナがけだるそうに言い放つ。
…すると。

カティア「……と思ったら、あそこにポツポがいますよ。」

カティアが指差す方向から、野生のポツポが迫って来た!!

カルヴィナ「…チツ、面倒だわ。 テニア、”オルゴンクロー”!
！」

テニア「それちがう!! 『ひっかく』でしょ! なんだよ、『オ
ルゴンクロー』って!?!」

素早くツツコミを入れつつ、

テニアは『ひっかく』をくりだした!!

ばしゃああ!

ポツポ「ぎゃああッ！」「バタッ

野生のポツポは倒れた。

カルヴィナ「はぁー。メンドー……」

なにやら、テニアが倒れたポツポを見て、よだれを垂らしていたが、面倒なのでカルヴィナは無視をした。

…そんなこんなでカルヴィナ達は、次の町に到着した。

第2話「トキワシティとその森」(前書き)

テニア「その森って…。」

カルヴィナ「だって、単なる付属じゃない？ あの森。」

テニア「適當過ぎるよ、この小説…。」

第2話「トキワシティとその森」

……なんとかトキワに到着したものの、彼女達はここで何を
するのだろうか？ 少し覗いてみよう

カルヴィナが、オーキドから貰ったタウンマップを使って、
現在地を検索している。

カルヴィナ「…タウンマップによると、ここはトキワシティのよう
ね。」ピッ…

カティア「あのおう、クーランジュさん、まずはフレンドリーシヨッ
プへ行きませんか？」

カティアが提案した。

メルア「そうね……。これからのことを考えると、毒消しとかがほしいですね。」

確かに、トキワの森でビードルに毒バリを使われるのは、必然である。

テニア「オツケー！　じゃ、レッツゴー！」

カルヴィナ「何で勝手にアンタ達がしきってるのよ……。」

カルヴィナは呆れ返った。

ポケモンがトレーナーに指示をするなんて、前代未聞。ベテラントレーナーの自分でも、今後の扱いには苦戦を強いられそうだ……。

そんなことを考えながらも、一応、カティアの正論には付き合わなくてはならない。

カルヴィナは渋々、ショップへ向かって歩き出した

- ショップ -

自動ドアが開いた瞬間、ショップ店員がこの上ない作り笑いをして、カルヴィナ達を迎えた。

店員「いらっしやいませ……ん……？ 君達は、マサラタウンから来たのかい？ だったらこのお届けものを……。」

カルヴィナ「……………」イラッ

カルヴィナはいらついていた。

…面倒臭がりのカルヴィナにとって、頼まれごとをされるほど嫌なことは無い。しかも、この店員は要するに、私達に今来た道を戻れという。この私に、そんな強要する権利なんか、こいつにはあるとでもいうのか……!?

ふざけるな…ッ!

とうとう、カルヴィナのヒステリーが発動した!

カルヴィナ「私達を使おうとはいい度胸ね。 …見ず知らずの人間に、普通大事なあずかり物を届けさせる? アンタ馬鹿じゃないの?」

店員「え……」

テニア「そうだよッ！ そんなこととしてまで、宅配料金節約しよう
つての?! この人で無しがッ！」

テニア達も、ここぞとばかりに便乗し出したッ！

カティア「最低ですわね、その根性。 さぞ、嫌われ者なんですよ
ねえ。 貴方は。 おそらく、友人もいないのでしょうか？」

テニア「こんな奴がいるから、ダメなんじゃないの？ カントーは
さあ……！」

カティア「ですわね。人は皆、最低限の教養を身につけるべきであると思いますが。貴方からは、それが一片たりとも垣間見ることができません。故に貴方という人間は……」

カルヴィナ「わかるわ。クズ人間ね。」

メルア「…というか今の時代、ポケモン転送とかはできるのに、荷物の転送は無理なんですかあ？」

テナ「アハハ、何その基準？ キモ過ぎるわ、この世界観！」

カルヴィナ達の容赦ない言葉斬りが炸裂した。正に完膚なきまでの誹謗！ 中傷！！…この店員だけの中傷じゃなかった気もするが、まあいいだろう……

店員「う、うう……」グスン……

凶星を突かれた店員は、ショックから立ち直れず、このあと辞職したそうだ。

- 買い物も終えて -

カルヴィナ「……さ、面倒臭いから、テキパキ進むわよ。次は……北のトキワの森を経由して、ニビシティに抜けましょう。………ん？」

テニア「なんか近づいてきてるよ。」

じじい「接近!!」

四人「……」

じじい「ういっ……待て……待っんじやっ!」

じじいの、いきなりの巻き付く攻撃!

メルア「キヤー！！ セクハラー！！」

テニア「このクソじじい！ メルアになにすんだ！」

カルヴィナ「…かまわないわテニア、邪魔だから、じじいを燃やさない！！」

カルヴィナが、処刑執行の指示をだした！

テニア「オツケー！！ 成敗ッ！」

テニアの火炎放射！

ゴオオオ！！！！

じじい「そ、そのレベルで火炎放射だと？ ……ぎ、ぎいやああ
あああああああああああああああッ！ ……！」

じじいは、あっという間に黒焦げに……

テニア「擬人化の力…、なめんなよ！！」

じじい「ドサ……」

テニアのセリフと同時に、じじいは倒れた。

カルヴィナ（なんなの、この町は…？ ろくな人間がない。 ……
… 人の心が、腐り始めてる…？）

『DC戦争』が終結してから、割と長い時間がたったこの世界…。

犯罪も多発し、世界中の人々は、自己中心的思考を露出させてきている……。

人の共生システムの欠落が、見て取れる。

カルヴィナ（平和という名の腐敗、か…）フツ…

カルヴィナは小さく笑った。

セクハラじじいを焼き払った後、カルヴィナはふと気になることで、テニア達に質問をした。

カルヴィナ「じじい倒したけど、テニア、あんた達いま、何レベルなのよ？」

テニア達は素早く答えた。

テニア「8」

カティア「6」

メルア「5です…。」

カルヴィナ「……やっぱり、じじいを倒しただけでは、経験値が心もとないわね…。」

トキワの森で、ある程度頑張る必要があるわね。」

カルヴィナが腕を組んで、考える仕草をした。

メルア「ニビの、目が閉じてるいわタイプ使いに負けるなんて屈辱的過ぎますもんね……。」

この一人と三匹は、「負ける」ことなどまずあつてはならない。

…という考えを持つ者達である。 例えるなら、ゲーム『スーパーロボット大戦』で「全滅プレイ」は、負け犬のやることだと思っている。

というか、作者自体、スパロボは毎作品、一度も全滅プレイせずにクリアしてるので、やるとどうなるのか知らないけど。

テニア「トキワの森は確か、虫タイプが多いはずだよね！ ならばアタシが焼き払ってやる……！」

テニアはやる気まんまんのようだ。
…だが、カティアが文句をつけた。

カティア「それでは、レベルが偏っちゃっわよ…。」

それを聞いたカルヴィナも、頷いた。

カルヴィナ「カティアの言うとおりよ。レベルは、カティアとメルアを中心に上げることにするわ。」

パーティーは、全員同じレベルで統一する。

これは、カルヴィナの長年のトレーナーの性である。

テニア「はあい……」 ションボリ

全員が納得し、トキワの森へ進もうとしたとき、カティアが何か見つけた。

カティア「おや……？ あつちに怪しい三人組がいますわ。」

メルア「喧嘩しているみたいですよ！？」

カルヴィナ「フン。 悪い奴なら叩きのめし、テニア達の経験値に変えるまでよ……！」

ミズホ「ラージさん!! どうなるんですか、私達!?!」

整備士のようないでだちの少女が、眼鏡をかけた男性に叫んでいる。
男性はラージというようだ。

ラージ「僕はプライドを粉々にされたんですよ!!」
ミズホ「そんなこと、どうだっていいでしょうッ!!」

怒鳴り合うふたりを、もう一人の女性が制止する。

フィオナ「二人とも、落ち着きなさい!」

テニア「なんか、揉めてるみたいだね…。悪い人達ではなさそう
だけど…。」

カルヴィナ「悪人じゃないなら、関わる義理は無い。面倒だし、無視して行くわよ。」

カティア「待つてください！ クーランジュさん！」

カティア「貴女には、困っている人を助けるといふ心はないんですか……？」

カティアがカルヴィナを睨みつけた。

その目は、カルヴィナを不快にさせた。

カルヴィナ「チツ……勝手になさい。」

カルヴィナに許可を得たカティア達は、三人組に近づいた。

カティア「あの…どうされたんですか？」

カティアが、自分がポケモンだということも忘れ、三人組に質問した。

ミズホ「今、とりこみ中……って、え！？ ポケモンが話してる…？
まさか、あなた達は…！？」

女性はひどく驚いている。

…が、どうも、擬人化ポケモンを初めてみたからというだけの理由ではなさそうだ。

ラージ「ミ、ミズホさん…！」

ラージというらしい男が、何かを言おうとしている彼女を制止した。

ラージ「いや…、すみませんね。僕達、道に迷ってしまっ…。」

フィオナ「……そ、そう！！　そんなですよ！　決して、怪しい者では……（汗）」

慌てて、フィオナもラージに習った。

メルア「はあ……。」

どうみても怪しい三人に、カルヴィナ達は疑惑の目を向ける。

中でも、カルヴィナはとくに。

カルヴィナ「……………」ギロ……

ラージ「う……………」(汗)「

ラージは、カルヴィナの鋭い視線に、背中が凍るようなものを感じた。

例えるなら、何か品定めをされているような気分を感じとったのだ。

ラージ「こんなプレッシャーは、今まで感じたことがありません……」

ラージ「…あ、貴女がた、どこか研究施設をご存知ありませんか？」

ラージは慌てて、話題を切り替える。

カルヴィナ「それなら、南のマサラタウンに、オーキド研究所というのがあるけど…。あなた達は、何者なの？」

カルヴィナの疑惑の眼差しは、まだ解けない。

ミズホ「え、ええと……」

ラージ「僕達は、新しいエネルギーを求めるしかない研究員ですよ…。」

ラージが、切羽詰まって言った。

フィオナ（そうよね…）。

セレビイの時渡りに巻き込まれ、五年後の未来から飛ばされたなんて、信じてもらえるわけがない…。

この人が、『カルヴィナ』なら、助けてくれたかもしれないけど…。

有り得ないよね…。私の知ってる『カルヴィナ』は、ポケモントレーナーじゃなくて、連合軍の戦闘機乗りのはずだもん…。（

そう考えると、フィオナは少し残念な気持ちになった。

五年後の世界から来た、フィオナには、『カルヴィナ』という憧れの人物がいた。

テレビでしか見たことがない、五年後の世界のその人は、命を懸けて地球を危機から守ろうとして…

死んだ。

ラージ「……場所を教えてください、ありがとうございます。では、僕等はこれで。」

カティア「あ、はい。頑張ってくださいね。」

そんな中、カルヴィナは一人考えていた。

カルヴィナ（なにか怪しいけど…。
こいつらは、例のあの事故との繋がりはなさそうね…。ならばもう、用はない…。）

カルヴィナ「あんた達、行くわよ！」

カルヴィナは踵をかえし、再び歩き出しながら言った。

カティア・メルア・テナ「はい！（うん！）」

トキワの森

カルヴィナ達がトキワの森に到着すると、不審者が一人でブツブツ言っていた。

カルヴィナ「またかよキモス。」

テニア「やれやれだね。 アタシが様子を見てくるよ。」

テニアが、その男に歩みよると……

Dボウイ「ここは……ラダム樹の森か……？」

テニア

(何だこの根暗……？) (……)

テニアが思考を巡らせ、ある答えに辿り着いた。

テニア（…うわやべえ。こいつマジキチだわ…！ にげろやにげろ…！）ダッ

Dボウイ「え、いや、ちょ…待っ…！ って、うわあああああ
…！！？ HELP…！」

男は崖から転落。

テニア「じ、自滅しちゃったよ、あの人…。」

さすがのテニアも、罪悪感があった。

彼はこの小説に関係ありません。伏せんとかではないので、気になさらず〜。

メルア「誰だったの？ テニアちゃん」

テナ「さ、さあ…？（汗）」

カティア「気味が悪いですね…。関わらないことにしましょうね…。」

カルヴィナ「ま、それもいいんじゃない？」

しばらく森を歩いていくと…。

キヤタピー「ぴー」

カルヴィナ「野生のキヤタピー……。 カティア、たいあたり!!」

カティア「イエス、ママ。 ……このお!」

グシャツ!

キヤタピー「ぴ、ぴいッ!!!!?」

カルヴィナ「ふう。 かるく20匹は倒したわね。」

カティア「はい。 お陰で、カも付いてきたみたいですね。」

メルア「私もです！」

そんな中、テニアはふくれていた。

テニア「……………う~~~~」

メルア「どうしたの？テニアちゃん」

メルアがテニアは具合が悪いのかと思い、心配そうに聞いた。

しかし。

テニア「燃やし尽くしてやりたい……！
この汚らわしい虫どもを……！！」

メルア「……………え？」

聞いて損した。

カルヴィナ「……………まあいいわ。さて、リハビリがてら、そこらへんの虫採りをボコリましようか。

メルア、カティア、準備はいいわね？」

カティア「いつでも！」

メルア「……」

カルヴィナ「メルア、返事は？」

メルア「は、はい！ ……でも私、あまり対人戦とか、好きになれなくて…。」

カルヴィナ「……」

カルヴィナは、どうもメルアのこの態度が気に入らない。

カルヴィナ「……私をトレーナーに引き戻したのは、アンタらの主人なんだからね。嫌でも役に立ってもらわ…。」

テニア「……」

メルア「わかりました…。わがまま言ってごめんなさい……。」

テニア（前からだけど、なんでクーランジュはこんな態度なんだろう…？）

クーランジュの過去に、何かあったのかな…。）

そんなシリアスな空気の中、空気を読めない虫採りくんが乱入！！

虫採り「お、トレーナー発見！ 早速バトルしてもらっぜ！」

カルヴィナ「ふん。尻の青い坊やが、私の前に出てくるな！！」

余裕をみせ、軽く悪態をつくカルヴィナ。

カティア「クーランジュさん、今回は私が行きますね！！」

カルヴィナ「グッドラック」

-バトル開始-

虫採り「ようし。捕まえたばかりのこいつで!」!

虫採り少年は、ビードルを繰り出した!

カルヴィナ「そんな、にわか仕込みのポケモンなんかで、勝てる
でも思った!?! カティア、敵のビードルの後ろに回り込みなさい
」!

カティア「はい!」ビュッ!!

虫採り「あ、あれ……？ な、なんだ！？あのフシギダネ……？ 人間……なのかよ……！？」

今頃気づいた虫採りは、慌てた。
…馬鹿だ。

カルヴィナ「敵の動きが止まった！！ 今よ、カティア！ つるのムチを打ちなさいッ！」

カティア「はいッ……！」

バチイッ……！！

ビードル「あべし……！」 バタ……

ビードルは倒れた。

虫探り「そ、そんなあ！」

虫探りがビードルに駆け寄る。

虫探り「じゅめんよ、ビード……って、ん？」

どす黒いオーラが迫ってきた……。

カルヴィナ「甘いのよ……アマチュアが……。私の前にしゃしゃり出てきた罰よ！ カティアの経験値の糧となりなさい……！」

その後もカルヴェイナ達は、虫採り達を人間ごと倒し、多くの経験値を手に入れて、無事、トキワの森を抜けるのであった。

第3話「タケシってホモらしいわよ。」（前書き）

メルア「え！？ 本当ですか、クーランジュさん！？」

カルヴィナ「噂によれば、ね。」

カティア「キシヨい……」

テニア（アタシ戦わなくて済むから、ラッキーだ……！）

第3話「タケシってホモらしいわよ。」

・ニビシティ・

カルヴィナ「着いたわね。 皆、ここがニビシティよ。」

タウンマップ片手のカルヴィナの説明を聞き、一同は町を見渡している。

テニア「ふうん。 まあまあな町じゃん？」

何様だろうか。

カティア「あの、わたしニビ博物館へ行きたいんですが…。」

カティアは文学的な物に興味をもつフシギダネであった。

……が。

カルヴィナ「ハ！！ あんなどこ、廃人が行くところよ。面倒よ。
行くなら、あんたが一人で行きなさいな。」

カティア「ひッ!？」

カティアに対して、カルヴィナのメツタ斬り毒舌が発動した!!

効果はばつぐんだ!

メルア「私は眠たいですう……。」

カルヴィナのメツタ斬り毒舌が発動した!!

効果はばつぐんだ！

メルア「私は眠たいですう……………」

メルアも拒否のようだ。

テニア「…そんな食べ物も無いような所、つまらないよ。」

…こいつのほうは元より、食べ物にしか興味無かった。よって、多数決によりカティアの負けは確定した。

カティア「……………（涙）」

カルヴィナ「それよか、ジム戦よ。ジム戦。さ、行きましょつか。」

物語(?)をスパスパ進めたがる女、カルヴィナ。

- ニビジム -

お約束、タケシの子分がカルヴィナ達に立ち塞がった!!

ボーイスカウト「ん? お前がタケシに挑戦!?!100000光年早
いんだよ!!」

カルヴィナ「ふん。馬鹿にされたものね。邪魔をするのなら…。
ハアッ!!!!」

バキッ!

カルヴィナはボーイスカウトに、とびけりをかました!!

ボーイスカウト「ぐうっ!? しまっ…た…光年は時間…じゃない
…距…離…だ」ガクッ

ボーイスカウトは致命傷を負った!!

テナア「ク、クーランジュ!?!」

擬人化達一同、啞然となった。

カルヴィナ「こんな雑魚、あなたたちがでるまでもないわよ。い
いりハビリになったわ。」

カルヴィナはあっさり言い切った。

メルア「そういふ問題じゃ…(汗)」

カティア「よしなさい…。 多分何を言っても無駄だから……。」

と、そこへ何者かが現れた……

タケシ「お前達、何やってるんだ！（怒）」

カティア「怒られましたよ！」

カルヴィナ「あんたが、タケシね！！ あんたにバトルを申し込むわ！」

カルヴィナが叫んだ。

タケシ「ん……？ おほ！ よく見ると綺麗なお姉さんたち！ よろしければお付き合いを……」

カティア「……は？」

カルヴィナ「チツ……どうやら、タケシがホモってのはデマだった

ようね。 あんた達、気をつけなさい！！ 襲われるかもしれない！！」

カルヴィナがマジな顔で言った。

メルア「え〜ッ！」

カティア「冗談じゃないわよ！」

全員、気持ち悪そうな顔をしている。

タケシ「むふふ……………って、よく見るとおまえら三人……………」

人間じゃねええ！！！！！！」

テニア「……」

カティア「……」

メルア「……」

この時、テニア達の心に殺意が芽生えたのは言つまでもない。

- いよいよバトル開始 -

カティア（…タケシ絶対殺す。）

すでに、いつものカティアじゃない。

審判「始め!!」

タケシ「イシツブテ、逝け!!」

テニア「は……?」

「行け」をわざと「逝け」と間違えるネタに、一同は凍りついた。

カティア「その漢字ネタは
もう聞き飽きたわーッ!!」

バシイイッ!!

カティアのつるのムチがイシツブテにクリーンヒットした!!

イシツブテ「!!?」

あまりの強力な攻撃に、イシツブテが吹っ飛ぶ。

そこへ、カティアが俊足で駆け寄り、第二撃を叩き込む!

カティア「お別れね!!　これで、墮ちてええーっ!!」

バキッ!

「イシツブテ」

「イシツブテは倒れた！」

審判「イシツブテ戦闘不能!!!」

カティア「勝った!!! ハッ! ざまあみるタケシWWW」

メルア「カ、カティアちゃん!?!」

テナア「キャラが崩壊しちゃってるよ...」。

カルヴィナ「ま、それもいいんじゃない? (笑)」

「カルヴィナ、それでいいのか。」

タケシ「オー、ノー！ ミーノポケモンガ！！」

テニア「マチスか貴様は。」

相変わらず、寒いギャグばかり飛ばすタケシ。

・つづいて、二回戦・

タケシ「行け、（俺の）イワーク！！（笑）」

今度は、タケシのネタにテニアを除いて全員、特に反応しなかった。

テニア「今、言葉の間に何かはさまなかった…？」

カルヴィナ「気にしないのよ。 あいつが変態なのはもうわかってることでしょう？」

テニア「なるほど、それもそうか。」

テニアはそれで納得がいったようだ。

- - - - -

カルヴィナ達がのんきに雑談している間にも、カティアとイワークの壮絶なバトルはつづいている！！

カティア「ハアハア……！強いわコイツ……！」

カルヴィナ「タイプでは有利のはずなのに、圧されている………良くない傾向ね。」

カルヴィナが唸った。

メルア「カティアちゃん、頑張つて！」

タケシ「ぬへへ！ イワーク、体当たりだ！」

イワーク「グオオン！」

ドカツ！！！！

弱っているカティアには、その攻撃を避けることが出来なかった。

カティア「ッ！！……グ……不覚……」

テニア「カティア！！」

カティアのもとに、テニア達が駆け寄る。

メルア「クーランジュさん!! わたし、行きます!」

カルヴィナ「ええ! 任せたわ!」

カルヴィナは、このゼニガメの力を見るのもいいと思い、戦わせてみることにした。

タケシ「おほ! ポケモンだけど、結構いいからだしとるねえ!」

メルア「見ないでください! このケダモノ!」

タケシ「いいねいいね! もっとボクのこと馬鹿にしてえ!」

あまりのキモさに、一同はしばらく出す言葉もなかった。

テニア「あいつ絶対後で燃やす!」

メルア「行きますよ！それ！！」バツ！

タケシ「やくん、カメなのに動きがはやくい。」

メルア「えーい！」

ぶしゃああ！

イワーク「グ、グオオオ！？」

テナア「うまい！ フィールドの岩の影にかくれ、相手の死角から
確実に水鉄砲を当ててる！！」

カルヴィナ「あの子…センスがあるわね…。」

カルヴィナは、あのメルアがここまでやってくれるとは思って
もみ
なかつた。

メルア「この！この！この！この！この！この！この！この！この！」

イワーク「ガッ！！」

遂に、メルアの攻撃に耐え兼ねたイワークが倒れこんだ！

審判「イワーク、戦闘不能！よって勝者、……え〜と、どっかの町
のクーランジユ！！」

審判はクーランジユの出身をしらないので、適当なことを言った！

カルヴィナ「どっかの町はないわね……」怒

テニア「でも、やった!!」

メルア「クーランジュさん、勝ちました!!」

カルヴィナ「よくやったわ!　メルア!!」

カルヴィナ達は、メルアの勝利を喜んだ。

タケシ「…確かに強いようだな。　よし、このグレーバッジをあげよう!!」

今さら、タケシはまともなことを言った。

カルヴィナ「」

テニア「」

カティア「」

メルア「」

カルヴィナ達全員から、
またも黒いオーラが発せられた……！

タケシ「どうした？」

カルヴィナ「……お前は散々、私達をからかった。
その報復から、
逃れられはしない……！」

テニア「……燃える」

ぎいゃあああああああああ……！！

ニビシテイ中に、叫び声が響いた!!

「倒れたタケシからバッジを奪いなさい！」

「オツケー！」

「わざマシンも一応引き剥がします？」

「ええ。金もわすれないで!!」

「財布財布　あれ？中身少ない!？」

「八十円…まさかの虫取りと同じ額…。」

「役立たずが……。」

第4話「Moon Knights」(前書き)

テニア「タケシキモかったね〜！」

カルビ「バッジはぶんどったし、ジムは跡形もなく燃やしたし、
一件落着ね」

カティア「町の平和も、これで戻るでしょうね。」

メルア(私は……ッッ)むべきですかね？)

第4話「Moon Knights」

カルヴィナ達は、ニビシティのポケモンセンターから出てきた。

擬人化していても、ポケモンはポケモンなので、回復はしてもらえないらしい。

カルヴィナ「さて、皆の回復も済んだし、オツキミ山へ向かいましょうか。」

タケシも無事にブツ潰せたので、カルヴィナの気分は良かった。

それに、テナア達は中々見所があると思い初めていた。

テナア「月……。」

オツキミ山の、『ツキ』というフレーズに、テナアが顔をしかめた。

カルヴィナ「…？ どうしたの？ テニア。」

テナ「いや…。なんか嫌な感じがして…。」

すると、メルアが驚いた。

メルア「え…！？ テニアちゃんも？ わたしも、なんだかおかしいんです…。」

カティアも、深刻な表情をしている。

カティア「私もです。なんか体が震えて…。」

カルヴィナ「どうしたの？ あんたたち、大丈夫？」

カルヴィナの質問に、テナが首をブンブンと振って、気分を落ち着けてから答える。

テニア「…だ、大丈夫だよ！ さあ行こう！！」

カルヴィナ「……？」

カルヴィナは、明らかに動揺している三匹が気になったが、とりあえずオツキミ山へ向かった。

オツキミ山までの道にいるトレーナー達が、カルヴィナ達に因縁をつけてきた。

……が、一人残らずコテンパンにし、多くの経験値と金をまき上げることができ、自然とテニア達にも笑顔が戻っていた。

テニア「…それにしても、クーランジュはまだ一匹もポケモン捕まえてないよね？」

テニアが思い出したように聞いた。

カルヴィナ「そういやそうよね。私、なんでジム戦なんかやったのかしら？ ホントはポケモン図鑑の作成が依頼なのに。（焦）」

テニア「え、ええ〜!? クーランジュ、何も考えてなかったの?」

テニアが呆れ返る。

カルヴィナ「ええ…。なんか、ノリで行動しちゃったわ。不覚。

(照)「

カティア「(照)じゃないでしょう、もう!

やれやれ…。今からでも間に合いますよ。この辺のポケモンを捕まえましょう。」

カティアの提案により、暫くこの辺りを探索してみることに。

- 数十分後... -

メルア「全然捕まりませんね……」

全員、汗だくである。

カティア「おかしいわ……。この辺は、プリンとか、オニスズメたちが生息しているはずなのに……。」

テナア「……！！！」

その刹那、テナアが何かを察知した！

テナア「……オツキミ山で、何かが起こってる……！！止めなくちゃいけない……！」

カルヴィナ「え？」

テナア「クーランジュー……！急ごう！何か胸騒ぎがする……！」

カルヴィナ「あ、ちょっとテニア！ 待ちなさい！」

カルヴィナ達は、山のふもとのポケモンセンターで準備を適当に整え、洞窟へ入っていった。ゴゴゴ……

カルヴィナ「洞窟が、ゆれている…？ 一体、何なの！？」

メルア「……嫌な予感しかしません…。」

テニア「皆！ こっちだよ！！」

テニアの向かう方向に、一同は走った。

・オツキミ山 最深部・

何やら、正体不明の二つの軍団が対峙し、戦っているようだ。

…が、もう一方の軍団は、何故か何の抵抗も見せぬまま敗れ去っているように見えた。

ジュアーム「へ！　どいつもこいつも弱っちいんだよ！！　死にな
！」

グサツ！

ロケット団員1「ぐわああっ！！！」

黒い制服の男は、血を流しながら倒れ、もう二度と起き上がらなかつた。

ロケット団員2「何なんだコイツら…？　強すぎる！　う、うわあ
あ！！！」

ジュアーム「ハ！！　雑魚なんぞに名乗る必要もねえよ！！　お前
達どつせ、ここで皆殺しにされんだからよ！！！」

ジュアムという名前らしい男のもとに、彼の仲間らしき者が近寄ってきた。

「???」よし…。ジュアム。　　ラースエイレムを起動し、一気にこの地球人達を殲滅するぞ。」

ジュアム「了解しました!!」

ジュアムは、先程の態度とは一変し、その男に了解した。

間もなく、何か特殊な装置が作動した。

ピカア!!!

そこへ、カルヴィナ達が到着した！

テナア「……！！ あそこに誰がいるよ！ 戦いが起こっているみたい……！」

カティア「でも……、おかしいわ……。片方の集団は、全く動いていない……。……。」

まるで、時間が止まったみたい……。」「

カティアが最初に気づいた。

カルヴィナ「確かに妙ね……。しばらく、向こうの出かたを見ましよう……。」「

なんともいえない不安に駆られたカルヴィナはそういって、岩影に隠れるよう、テナア達に促した。

- - - - -

ジュアーム「掃討は完了。 楽勝だな!! 皆殺しだ。」

テニア「あ、あれだけの人数を、一瞬で!?!」

テニアが慄然としている。

その時、カルヴィナ達の存在に、ジュアームの上官らしき男が感づいてしまった。

???「む…? あの物陰にも、地球人が残っているようだな…。
ラースエイレムを再起動する!!」

ピカア!!!

カルヴィナ「チツ! どうやら、気づかれたようね!! 皆! 戦

う準備を……………」

カルヴィナがカティア達を振り返ったが……。

メルア「……」

カティア「……」

カルヴィナ「え……？」

カルヴィナとテナアを除いて、二人は完全に硬直し、微動だにしなかった。

カルヴィナ「な、何なの……！？ 何よこれ！？ どうして二人とも動いていないの……！」

予想外の事態に、流石のカルヴィナも取り乱した。

テナア「やっぱり……。」

テニアが呟いた。

カルヴィナ「え？」

テニア「ようやくわかったよ。博士がクーランジュに私達を託した理由が。」

カルヴィナ「何…？」

テニア「あの謎の敵、相手の時間を止めてしまう装置を持っているんだ。でも、私とクーランジュはその効果を妨害できる能力がある……。」

カルヴィナ「何でそんなことわかるのよ!？」

カルヴィナが叫んだ。

テニア「よくは、わからないけど…。前にオーキド博士が、私達三匹はサイトロンに適應するポケモンだって言っていたんだ。それ

かもしれない……。」

カルヴィナ「サイトロン……？」

テナ「わかりやすくいえば……少し未来のできごとがわかったり、相手の考えていることがわかったりする能力だよ。」

カルヴィナ「そんなことが……？」

テナの語るそれは、カルヴィナの常識には無く、カルヴィナは戸惑った。

テナ「クーランジュ！！力を貸して！敵のラーズエイレムを打ち消す！！」

カルヴィナ「ラーズエイレム……？」

テナ「あいつらが、その装置を使っているのが、サイトロンで見たんだ！！そのシステムを止められれば、またカティアとメルアの時間が動きだす！アタシの力とクーランジュの力を借りれば、

それができる!!」

カルヴィナ「わかったわ! やってみせなさい!!」

カルヴィナは、いつそテニアに任せてみよつと思った。

テニア「うん!!」

行くよッ! えいッ!!」

ピカアッ!!」

ジュアーム「ふん!! まだゴミどもが隠れていたか。まとめて殺す!!」

ジュアームは、既にカルヴィナ達の時間が止まっていると仮定し、カルヴィナ達に向かって走り出した。

…が、すぐに上官の男がラースエイレムの異変に気づいた。

???「ん…？ ステイシスが確認できん…！？」

そいつは、慌ててジュアムを呼び戻そうとした。

???「待て！ ジュアム！ ラースエイレムシステムのムーヴが…？ クツ、どういことだこれは？」

ジュアムも、止まっているはずが、動いているカルヴィナ達を見て、焦った。

ジュアム「な、何！？ 何でコイツら動いてるんだよ！？」

テナア「あんたらの好きにはさせないよッ！」

カティア「行くわよ皆！」

メルア「わかったわ！ カティアちゃん！」

カルヴィナ「皆、動いてる…。 とりあえずは、何とかなったのね

「!

カルヴィナが胸を撫で下ろす。

…が、それもつかの間であった。

「ジュアム、チ、動けるからって、俺達に勝てるものかよ!」
「バ
ツ!

メルア「は、速い!! あの人、人間じゃないんですか!？」

メルアが驚くのも、無理もない。

ジュアムは、車並の速さで向かって来たのだ。

カティア「そんな…動きが見えない!？」

ジュアム「遅い!!」

バキッ!!

カティア「きゃあ!!」

カティアが吹き飛ばされた!

テニア「次元が、違う…。」

カルヴィナ「私達…、殺されるのか…。ここぞ。」

カルヴィナは覚悟した。

が、その時、横から何者かが現れた。

?「待ちなッ!!」

ジュアラム「ん…? 誰だ…?」

? 「なんだかんだと聞かれたら…」

? 「答えてあげるが世の情け…」

? 「世界の破壊を防ぐため…」

? 「世界の平和を守るため…」

? 「愛と真実の悪を貫く!」

? 「ラブリーチャーミーな仇役!」

ムサシ「ムサシ!」

コジロウ「コジロウ!」

ムサシ「銀河を駆ける、ロケット団の二人には!」

コジロウ「ホワイトホール、白い明日が待ってるぜ!」

ニヤース「なぐんでニヤ」

.....。

カルヴィナ「.....誰よ？」

テニア「さあ.....。」

一同、突然の不審者の出現に、啞然としてしまった。

ジュアム「なんだ貴様ら！？ 邪魔するなら、貴様らからぶっ殺してやんよ！！」ダッ

ジュアムが謎の三人組にターゲットを変更し、駆け出した！

ムサシ「ふ。 かつたわね!!」

ムサシと名乗った女が、ほくそ笑む。

ジュアム「何…!? ぐわあっ!!」

ジュアムは、落とし穴に落ちてしまった。

テナア「お、落とし穴アー!？」

カルヴィナ（いつ掘ったのよ…）

ムサシ「あはは、どんなに強くても、あたし達が相手じゃあね」

「????」もともとこうなったのは、ラスエイレムに異常が出たからだ。帰還して、検査もせねばならんし、第一、これ以上お前に無理を強いるわけにはいかん。」

「ジュアーム」しかしッ!!

「????」騎士である私のいうことが聴けんか…?」

その男は冷静に言ったが、有無を言わさぬ威圧感があった。

「ジュアーム」め、滅相ありません!……く、お前ら、覚えていろ!……!」

「ヴォーン!」

カルヴィナ「消えた!？」

テニア「オルゴン・クラウドね……。
一種のワープだと思う……。」

カルヴィナ「そのことも、サイトロンで……?」

テニア「うん……。アタシ、今の戦いでサイトロンが完全に覚醒した
みたい。」

メルア「テニアちゃん、サイトロンが覚醒したんですか!？」

メルアが驚く。

どうやら、サイトロンのことは、全員オーキドから聞いたことがあるようだ。

カルヴィナ「後で説明するわ。 ……それより、あなたたちは……?」

カルヴィナはムサシ達に向き直った。

ムサシ「なによあゝ、さっき名乗ったでしょ？」

コジロウ「おいおい、ロケット団の中でも、エリート！ ムサシとコジロウのコンビを知らないのか？」

カティアが反応した。

カティア「ええ！？ 指名手配中の、狙った獲物は逃がさないっていう、あのコンビ！？」

テニア「な、何で、そんな人達がアタシ達を助けてくれたのさ？」

ムサシ「こつちにもいろいろ事情があつてね…。実は……………」

かくかくしかじか。

カティア「ええ！？ あの犯罪組織のロケット団が！？」

メルア「壊滅したんですか…？」

カルヴィナ「サカキが倒れたというの…？」

ムサシは残念そうに頷く。

ムサシ「その通り。月から来た、自らを『フューリー』と称する者達によって、ね。」

コジロウ「俺達ロケット団の残党は、志半ば倒れたボスの仇を討つべく、フューリーを追っていたのだ。」

ニヤース「それで、今に至るのニヤ。」

カルヴィナ「フューリー…？」

カルヴィナは初めて聞くはずの名前が気になった。

ムサシ「さっきの奴らよ。」

コジロウ「奴らは、時間を止める装置を使う。俺達ではなす術もなかったんだが、お前達はどうかやらそれを無効化できるようじゃないか。」

ニヤース「それが、ニヤー達がおミヤーらを助けた理由でニヤース。」

カルヴィナ「つまり、私達に協力しろと？」

ムサシ「そういうこと。見たところあんた達、さつき苦戦してたじゃない？ 私達と一緒に旅すれば、戦力増強にもなるし、悪い話じゃないんじゃない？」

カルヴィナはその通りだと思った。今度また、フューリーに襲われたら、今の戦力ですぐにやられてしまうだろう。

カルヴィナ「そうね…。わかったわ、これからよろしく。ムサシ、

コジロウ。」

ニヤース「ニヤーのことを忘れてるニヤー！」

カルヴィナ「そういや、喋るのね、このニヤース。　テニア達も喋るポケモンだから、違和感がなかったわ。」

テニア「でもアタシ、元は普通のヒトカゲだったんだよ。」

カルヴィナの言葉に、テニアが付け加える。

カティア「私も、メルアもですわ。」

カルヴィナ「そういや、あんた達がどうして特殊なのか、理由を聞いてなかったわね。」

カルヴィナよ、何故、そんな大事なことを聞かない??

カティア「そうですね。　この際ですし、久しぶりにオーキド博士に連絡とりませんか？」

テニア「アタシ、博士と話したいな。」

メルア「私もです！」

カルヴィナ「じゃあ、ひとまず、ハナダシティに抜けましようか。」

幸い、洞窟の出口も近く、カルヴィナ達は無事に脱出できた。

第5話「鋭利な『末路』」（前書き）

テニア「ていうか、サイトロンって、ロボットにも乗ってない状態で使える？ 普通。」

カルヴィナ「突っ込まないであげなさい。 作者も必死なのよ。」

第5話「鋭利な『末路』」

洞窟を抜け、ハナダシティへ到着した

カルヴィナ達。

カルヴィナ「じゃ、早速電話して見ましょう。」

カルヴィナは、ポケモンセンターに設置してある、テレビ・電話の受話器を取りつつ言った。

ブルルルル…

ガチャ

オーキド「……クーランジュ殿。」

カルヴィナ「あら…？ これは、画像付きボイスメッセージだね。
博士、留守なのかしら…？」

テナ「クーランジュ宛てなの？」

ムサシ「これが、オーキド博士…？」

画面の中のオーキドは、おもむろに語り出した。

オーキド「……このメッセージが流されたということは、ワシはもう生きてはおりません…。」

カルヴィナ「ッ！？」

カティア「え…？」

メルア「な、何で…!?!？」

テニア「…博士……。」

オーキド「皆、これから話すことをよく聞いて欲しい…。」

オーキド「まず、一つ目。ワシを殺しに来るのは、フューリーという集団じゃ…。」

コジロウ「な、なんだって!?!」

ムサシ「フューリーが…!?!」

カティア「……でも、どうして博士がフューリーに殺されなくちゃならないの…? 理由がないじゃない!?!」

カティアが叫んだ。おそらく、あまりに突然のことで、気が動転しているようだ。

カティアが質問しても、相手はただのボイスメッセージに過ぎない。

…が、その答えはすぐに返って来る。

オーキド「…二つ目、ワシもかつてはフューリーじゃった。」

一同「!!!?」

オーキド「元来、あやつらの目的は自分達が地球に移住することじや。それ故、あやつらは邪魔な地球人達を排除しようとしているのだ。」

カルヴィナ「フューリーは、他の星からやって来た異星人だと言っの…?」

カルヴィナは啞然とした。

ボイスメッセージはなお語り続ける。

オーキド「ワシは、その計画に反対した。 それによって、ワシは、月のフューリーの母艦、『ガウ＝ラ・フューリア』を追われてしまった……。」

テニア「月の…？ フューリーは、月にいる……？」

オーキド「若くして、地球に降りたワシは、地球に生息している、ポケモンという生物に興味湧き、いろいろと調べるようになった。」

カルヴィナ「……。」

カルヴィナは黙った。 そして、よく聞いておこう……。 そう思った。

オーキド「…月日はあつという間に流れていった。 ワシは、ポケモンに生きがいを感じるようになっていた。」

だがある日、ワシは、フューリーが本格的に地球侵略を始めることを知ったのだ。 その日、まだ小さいヒトカゲ、フシギダネ、ゼニガメが、フューリーの部隊に襲われていたのだ。

おそらく奴らは、地球に生息するポケモンという未知の生物についてのデータを得るつもりだったのだろう。フューリーにとって、ポケモンとは『イレギュラー』な存在だったのじゃ。ワシはその部隊を何とか退け、三匹を助けることができた。」

テニア「その三匹って……！」

オーキド「ワシは、地球もポケモンも好きじゃ。だから、奴らの思い通りにはさせたくなかった。ワシはその三匹に、地球の命運を託すことにした。」

メルア「博士……。」オーキド「ワシは、三匹に自分の研究成果のすべてを注ぎ込んだ。三匹それぞれに、フューリーに対抗するための『サイترون』と、ある特殊能力を与えたのじゃ。」

…じゃが、その力を引き出すには、サイترونに適応できる人間のパートナーが必要じゃった。

ワシはその役に、クーランジュ殿を選ぶことにした。」

カルヴィナ「何で私が…？」

カルヴィナの疑問に答えるように、ボイスメッセージは続けた。

オーキド「クーランジュ殿は、”例のあの事故”の唯一の生還者だったからじゃ。」

カルヴィナ「!!!?」

オーキド「ワシは、クーランジュ殿に危険が迫っているのを感じた。サイトロン適性のあるかもしれない、唯一の地球人を、奴らが生かしておくとは思えんかった…。」

カルヴィナ（博士は、あの事故のことを、どこまで知っていたの…
…?）

助手「博士、もうもちません!!」

画面に写る博士の後ろに、助手が飛び込んできた。

オーキド「く!? もう奴らに嗅ぎ付けられたか!! だが、これだけは伝えなければ!!」

……ワシは、クーランジュ殿が入院していた病院に会いに行き、クーランジュ殿が適性者であるか見極めた。

……結果、彼女は適性者だった。これで、地球を、ポケモン達の未来を安心して託せる。クーランジュ殿には、迷惑な話かもしれないが……おぬし達が地球を救うことを祈っておるぞ!!」

ブツン

テニア「あ……!? 博士ッ!!」

……そこでボイスメッセージは途切れてしまった。どうやら、そこで博士は……

テニア「博士ーッ!!!!」

数分後、テニア達は少しだけ落ち着きを取り戻した。

カルヴィナ「博士は、ポケモン図鑑なんて始めからどうでもよかつたのね……。」

テニア「うん……。博士は、クランジユとアタシ達をあいづから逃がしてくれたんだよ……。」

カティア「博士、いつも言っていました。お前達は、絶対に死んではダメだと……。」

メルア「博士……。うう……。」

メルアから、一筋の涙がこぼれた。

テナアとカティアも、必死で堪えているようだった。

カルヴィナ「あなたたち……」

カルヴィナ「あなたたち、ここでくじけては駄目よ……！ここで止まれば、オーキド博士の犠牲が無駄になるわ……！」

カルヴィナは優しく、そして力強く言った。

テナア「クーランジュ……。うん……！」

カティア「そうですね……。それが博士の願いだもの……。私、頑張ります……！」

メルア「私もです！」

三匹の目には力が戻っていた。

一方、ロケット団は怒りに満ちていた。

ムサシ「フューリー……。どれだけ悲しみを生み出すつもりなの……!?」

コジロウ「最低な奴らだぜ……!」

ニヤース「ニヤー達も本気で戦うのニヤー!」

カルヴィナ「ありがとう……。ロケット団。」

カルヴィナは、犯罪者の彼らでも、今はとても心強く思った。

カルヴィナ（それにしても……。私がサイトロンの適性者……。あの事故の生き残りっただけで、なんでわかるのかしら……。？ 何か関係があるというの……。？）

カルヴィナの疑問は深まるばかりだった。

しばらくして、テニアが何かを思い出したように叫んだ。

テニア「あっ!!」

メルア「テニアちゃん、どうしたの!？」

テニア「トキワシティで会った、あの三人組……!」

カティア「そ、そうだわ!! 確か、博士の研究所に向かったはず……!!」

カルヴィナ「ダメね……。もうどうしようもないわ。マサラタウンはすでに、フューリーに制圧されてしまっている可能性が高い……。行って、彼らの生死を確かめることは無理よ……。」

カティア「……私達が、研究所を紹介したせいで……。」

メルア「……」

カティアとメルアはひどく落ち込んでいるが、カルヴィナは別のことを気にしていた。

カルヴィナ（テニアの特殊能力は、リースエイレムの無効化だったけど、カティアとメルアは何なのかしらね……？）

カルヴィナにとって、あの三人組はどうもいけ好かなかったのだ。だからハツキリ言って、彼らが死んでいても、別にどうでもよいことだった。

あとは、カティアとメルアが利用価値のある能力を持っているれば、満足なのだ。

カルヴィナの心はまるで、鋭利な刃物を連想させる……。

ムサシ」とにかく、旅を再開しましょうよ。嫌なことも紛らせるわ…。」

ムサシの言葉に、一同は静かに頷いて、ポケモンセンターを後にした。

第6話「G・B・ブリッジの死闘！」（前書き）

一同の暗い気分を察してか、ムサシがゴールデンボールブリッジに行かないか。…と誘った。

カルヴィナ「えー？ 面倒臭いわね。」

テナア「第一、名前がキシヨイじゃん。」

ムサシ「和訳すると、金…」

一同「やめ~~~~い……い……い……」

前話で話しがシリアスに傾き過ぎたため、おちゃらけ雰囲気に戻します。

第6話「G・B・ブリッジの死闘！」

という訳で、カルヴィナー一行はとりあえず、ハナダシティの北にあるゴールデンボールブリッジへ行ってみることに……

なっただが……。

ムサシ「あ、そうそう。残念だけど、ロケット団が壊滅したから、金玉橋、今は営業してないわよ?」

テニア「ちょwww! この話のタイトルとまえおき文の意味がねえwwwwww!!」

テニアは初めて「www」という言葉を使った。使ってみたかったのだらう。

テニア「別に思っていないし!」

カティア「…テニア? 誰に言ってるのよ?」

テニアは、このナレーション文を読みとったのだ。物語の中のキヤラには聞こえないはずなのに……。これもサイトロンの力なのだろうか?

それはさておき。

話しを物語に戻そう……

カルヴィナ「…ま、ちょうどいいんじゃない? 橋にトレーナーがいると、面倒だし。」

すると、コジロウがイヤらしい顔つきで言った……!

コジロウ「なんなら、俺のきんのt……」

テニア「ッ!? チェストオオツ!!!」

テニアは、まるでニュータイプばりの反応速度でコジロウの言おうとした事を察知し、飛びかかるッ!!!!

これには流石のコジロウも焦った!

コジロウ「お、おいおい冗だ……」

グシャッ!!!!!!!

「コジロウ「ぐえー!!!?!?」

「テリア「そ……、そんなこと、言っなあぁーッ!?!」

「テリアは吐き捨てるように怒鳴ると、一気に金玉橋を渡って行った。

「メルア「ひどいです! 女の子に向かって!?!」ダッ

「メルアもテリアにつづき、泣きながら橋を駆けていった(笑)。

「残されたのは、悶絶しているコジロウと、カルヴィナ達。

コジロウ「ちょ…今、モロに…!!」

カルヴィナ「ご愁傷様〜。」

カルヴィナは多分、微塵もコジロウを心配してはいない。

コジロウ「うう、り…理…不尽…だ…っ!!」

ムサシ「これは、『膝蹴りヒトカゲ伝説』になるわね〜（笑）」

気を取り直し、橋を渡り先に進むと、小さな林（？）があった。
そこは、おもいつきりホモ臭いニオイのする山男達のたまり場であった。

カルヴィナ「なんか、この辺一帯がすでに汗臭いわね。（笑）」

カティア「…全くです…。」

そんなカルヴィナ達の前に、怪しい人影が近づいていた……！

ぬっ！

タケシ「やあ、君達　奇遇だね！」

た、タケシだ！！　テナアに体を焼かれても生きていたというのか
ッ！？

テナア「なんで、貴様がここにいるんじゃないッ……！？」

あわてふためくテナア達。　タケシは言わずと知れたド変態だ。
このままでは、何をされるかわかったものではない！

……が、カルヴィナは少しも慌てず、

カルヴィナ「皆いくわよ!! 『三位一体』!!!!」

テニア達に指示を出した!!

テニア・カティア・メルア「うおおおおッ!!!!!! 死ねええ
っ!!!!」

ゴゴゴゴゴ!!!!!!

火炎放射、ハイドロポンプ、ソーラービームと、チートとでも言うべき技を、一点に収束させた最大級特殊攻撃!!!!

タケシ「……光が……広がっていく……？」

ドガァーンッ！……！

タケシ「やあな感じいいWWWWWWWWW！」「キラーン！

タケシは星になりました。

そんなタケシの断末魔を聞いて、ムサシの一言。

ムサシ「ヒュー、ジャリボーイ大はよく飛ぶわねえ（笑）」

その後も、なんとか汗くさい山男達に耐え抜き、岬のマサキの家に到着することができた。

カルヴィナ「着いたわ。 どうやら、ここがマサキの家のようね。」

132

テニア「マサキって、ポケモンオタクの人だっけ？」

コジロウ「オタクじゃなくて、マニアだろ。」

コジロウが訂正する。

テニア「ええ〜？ オタクとマニアの違いって何よ〜？」

「コジロウ」さあ?」

コジロウも、よく知らないらしい。

ムサシ「ふん、どつちでも同じじゃない。 どうせ、ここには暇つぶしで来てみただけだし」。

ポケモンとか奪ってでもいいかもしれないけど、私は毒タイプが好きだから。 イーブイとか、実はキライだし。」

ニヤース「なんか面倒になってきたから、早く会って一秒で帰るいや。」

ガチャ

カルヴィナがドアを開けると、中にはマサキがいた。

マサキ「ん…？ なんだよ、お前ら？」

緑の髪をした、なかなかのイケメンだ。

ムサシ（ウホ！！ いい男！）

マサキ「何か用か？」

カルヴィナは、少し考えてから言った。

カルヴィナ「ラ・ギアスに行ってもお元気です。」

メルア「これから出会う、リユーネさんと仲良く過ごしてください。」

カティア「シラカワ博士によるしく。」

ニヤース「シロとクロによる。」

バタンツ

カルヴィナ達は、本当に二秒でマサキの家から引きあげた！！

マサキ「……………」

しばらくの間、沈黙するマサキ。

マサキ「何しに来たんだあいつら？ 訳の分からん名前ばっかり言
いやがって。 頭大丈夫か……………？」

だが、この数週間後、マサキは地上から姿を消すことになるのである。

テニア「これからどうする？」

カルヴィナ「カスミと戦うのもだるいわよね…。」

また、カルヴィナの『すぐに面倒臭い病』が振り返したようだ。

ムサシ「私達の目的は、フューリーから地球を守ることでしょう？」

ならジム戦とかしてる場合じゃなくね？」

ムサシが正論を述べた。

……では、さっきの金玉橋騒動はなんだったというのだ。

メルア「ムサシさんの言う通りですね。もう少し戦力が欲しいです。誰か引き込みましようよ。」

コジロウ「おいおい、これ以上キャラが増えたら、絶対影とか薄くなる奴が出てくるって!!」

影の薄いキャラ、コジロウが慌てた。

カルヴィナ「正論ね。ま、私は主役だから関係ないけど?」

テニア「え?主役アタシでしょ?」

またそうやって、メタ発言をする……。

カルヴィナ「は。 おムネの小さい、しかもトカゲポケモンのお嬢ちゃんが、何を言ってるんだか。 (3)」

カルヴィナは鼻で笑った。

テナ「な、何い〜!? 許せん!! 覚悟おし!!」

テナの尻尾の炎が激しくなった。
臨戦体勢になったようだ!!

カルヴィナ「上等よ。 なんならここで勝負する?」

カルヴィナ、なおも挑発。

そして、ふたりは自分の胸に手をかけた。

コジロウ・ニヤース（お、おおお！！）

メルア「や、止めてください！！ 人が見てますよ！！！！」

カルヴィナ「それもそーね（笑）」

テナ「危ない危ない……。」

二人は胸に手をかけるのをやめた。

コジロウ・ニヤース（…見たかった……）

男性陣は、ちよつとだけ残念そうにしていた（笑）。

話しが逸れたので、

ムサシが咳ばらいをして言った。

真面目な話しをするようだ。

ムサシ「…ところで、ヤマブキはシルフがあるけど…」

カルヴィナは、ムサシの言いたいことを大体悟った。

カルヴィナも真面目モードに戻る。

カルヴィナ「ええ。大体予想できるわ…。私は、前にあそこの姉妹社で働いてたからわかるんだけど、あそこはロケット団と密接に繋がっていたわ。だから、ロケット団がフューリーに倒された今は……。」

ムサシ「ご明察。ヤマブキも既に、フューリーに占領されている可能性が高い。だから今の戦力でむやみやたらに近くづのは危険よ。だから、今はひとまずクチバシテイへ行ってみない？ 私達

に、力を貸してくれる者がいるかもしれない。」

カルヴィナ「そうね。じゃあ早速、タウンマップに書かれてる地下通路とやらを通って……。」

ニヤース「その必要は無いのニヤ。」

ニヤースがニヤリと笑って言った。

カルヴィナ「……え？」

第7話「Revenge」(前書き)

カルヴィナ「『第二次スーパーロボット大戦OG』が、PS3で新しく出るみたいね。」

テナ「聞いた聞いた。スパロボDのジョツシュが出るんでしょ？」

カティア「私、プレ3持ってないですよ……」

メルア「ていうか、ホントに出るんですよね!?!?」

カルヴィナ「出るでしょ。……ま、私達のメンツは出ないでしょうけど。」

「テニア」さみしかね〜……。」「

第7話「Revenge」

カルヴィナ達は、ニヤース形の気球に乗り、空からクチバを目指していた。

テニア「へえ、こんな気球なんて持ってたんだ」

コジロウ「ハハハ、俺達はもともと、悪事のプロだぜ？ 移動手段は豊富なのだ」

コジロウが得意げに笑う。

カルヴィナ「お陰で、下のおめでたいトレーナー達と戦わずに済むわ。」

メルア「確かにあの人たち、のんき過ぎですよ。」

カルヴィナ「そう。あいつら、『ポケモンは友達だ』とか、普通にほざくからムカつくのよ。」

テニア「自分は、そのポケモンを戦わせて、傷つけるクセにね。」

ムサシ「そういう奴みるとさあ、ポケモン奪って真っ青にさせてやりたくならない？」

ムサシがニヤリとしながら言った。

カルヴィナ「一理あるわね。」

ムサシ「だから私ら、ロケット団に入ってたわけよ。」

するとコジロウが、カルヴィナをロケット団に勧誘しようとした。

コジロウ「ボスはもういないけど、カルヴィナさんも、ロケット団に……」

カルヴィナ「……………」

カルヴィナはコジロウが自分を『カルヴィナ』と呼んだことに反応し、急に目つきが鋭くなった。

カルヴィナ「私をその名前で呼ばないで。」

コジロウ「？」

カルヴィナ「私を名前で呼んでいいのは、一人だけなの。」

ムサシ「……………それ、恋人？」

ムサシの質問に、カルヴィナは寂しい顔をして答えた。

カルヴィナ「ええ…。もう、死んでしまったけど…。」

カルヴィナ（例のあの事故に巻き込まれて、ね。）

テニア「クーランジュ……。」

テニアは、カルヴィナが今まで無気力になってしまっていた理由を、垣間見た気がした……。

ムサシ「なんかシンミリしちゃったわね……。それより、見えてきた。クチバシテイよ。」

重くなってしまった空気の中、ムサシが執り成した。

・クチバシテイ・

町の市民が、何者かに襲われていた。 ……フューリーだ！！

住民1「キヤーー！！！！」

住民2「うわあー！！！！」

住民達は、悲鳴をあげながら、フューリーから逃げていた。 中には、赤ん坊を抱いて逃げる者もいた。

ジュア「ム「ハハハ！！ 死ね死ね！！ 地球に、フューリー以外の種族はいらねえんだよ！！！！」

キイーン…！！

住民1「……………」

住民2「……………」

町の人々は、リースエイレムによって時間を止められてしまった…
…。

従士「準騎士ジュアーム殿。この町の地球人は、全員始末しまし
た。」

ほとんど間もなかった。クチバにいた人間は、一人も残らず血ま

みれになって倒れていた……。

ジューアム「ご苦労……ん……？ また、ラースエイレムのステイ
シスが……？ 点検では、何の異常も無かったのに！！」

そう、カルヴィナとテニアが、ここに近づいた影響である。

カティア「キャアア！！！」

テニア「みんな……みんな、死んでるよ……。こんな……、こんな……！！！」

カティアとテニアは、怯えていた。クチバの、死んでいった人々の思いが、サイトロンを通じ、頭の中に入ってくる気がしたのだ。

ムサシ「あそこに、誰がいる!!」

ムサシが叫んだ。

カルヴィナ「…あの仮面の男……、この前のオツキミ山にいた奴！
？ フューリーか!!」

メルア「許せません……!!!! この町の人達が、何をしていたっていうの!？」

カルヴィナ「ええ……! 相手はまだ、こちらの存在には気づいていない。 先手必勝よ! テニア、打ちなさいッ!」

テニア「わかった！！ 火炎放射！！！」

ゴオオ！！！！

ジュアム「！？ よつと……！ なんだよ、いきなり。
危ねえな
！ ……つて、お前ら、オツキミ山の！？」

ジュアムは、軽くテニアの攻撃をかわしてしまった。

カルヴィナ「かわされた？ 今のを！？」

ジュアム「お…？ この前は暗くて分からなかったが…。まさか貴女は、カルヴィナ教官殿でありますか？」

カルヴィナ「な…！？ 何故、私の名前を…！？」

カルヴィナは驚いた。自分のことを知っている者など、もうほとんど居ないはずだったから。そう、カルヴィナは、例のあの事故で、すべてを失ってしまったのだから……。

戸惑うカルヴィナに、ジュアムが自分の正体を明かす。

ジュアム「やだなあ…、お忘れですか？ ジュアムですよ。あなたのかわいい教え子じゃないですか。」

ジュアムは、つけていた仮面を外してみせた。

確かにカルヴィナは、その顔を知っていた…。

カルヴィナ「ジュアーム!? 馬鹿な!! お前は、あの事故に巻き込まれて死んだはずだ!! 生きているはずが……!!」

ジュアームは、憎たらしい笑みを浮かべ、尚も続ける。

ジュアーム「はっ。俺達は、アシユアリーとシルフを利用したに過ぎなかつたんだよ。地球に発生したポケモンというイレギュラ―な存在を調べるために。」

カルヴィナ「なんだと!?!」

ジュアーム「へ。もっとも、アシユアリーの連中は、本気でポケモンのための道具を作ってるつもりだったさ。だが、データもある程度集まって、もうあいつらには用はなくなった。だから死んでもらったのさ。」

カルヴィナ「まさか、あの事故を引き起こしたのは……!!」

ジュアム「俺も、まさかあれ程の大規模な事故で、あんたが生きてるとは思わなかったよ。それに、生きているのは俺だけじゃない。」

そこへもつひとり、仮面の男が現れた…。

???「カルヴィナ……」

カルヴィナ「ッ!?!? この声……!?!? そんな……。…こんなの、嘘……!! 嘘……!!」

その声を聞いた途端、
カルヴィナの顔色が変わった。

テナ「クーランジュ、どうしたの！？　ねえ！！！」

心配になったテナがカルヴィナに声をかけた。　だが、今のカルヴィナには聞こえていない……。

ジュア「ム「カルヴィナですよ。　生きていたようですね。　アル
「ヴァン様。」

アル「ヴァン「…聞いていた。」

カルヴィナ「そんな……いい、嫌だ！　ねえ、アル＝ヴァン！！
私、こんなの嫌だよ！　悪い冗談はやめてよ！！　本当は、今まで
私とは別の病院に入院してたんでしょ！？　ねえ！！　冗談だと言
つてよ！！」

カルヴィナはさすがのように言った。

そんなカルヴィナと裏腹に、ジュア＝ムは涼しい顔で言う。

ジュア＝ム「バーカ。　そんなわけあるかよ。　第一、あの事故を
起こすのを指示したのはアル＝ヴァン様本人なんだぜ？」

カルヴィナ「ッ！！！！」

アル＝ヴァンは、カルヴィナに出来るだけ優しく声をかけた。

アル＝ヴァン「カルヴィナ……。　私達と一緒に来ないか？　来てく
れたら、君達全員の安全を保障しよう……。」

カルヴィナ「……………」

ジュアム「アルヴァン様…？」

テニア「カルヴィナ！ アタシ嫌だよ！ 博士を殺した奴らだよ！
？ 信じられないよ！！」

テニアが叫んだ。

カティア「…私もですわ！！」

メルア「私だってそうですよ！！」

コジロウ「お前らが、ロケット団を潰した!!」

ムサシ「許してはおけないよ……!?!」

ニヤース「ニヤ!!」

ジュアム「アルヴァン様、あんな地球人に何をためらうことがあります!? 貴方がカルヴィナを殺せないなら、自分が!!」

アルヴァン「待てッ!! ……カルヴィナ。私は、君に死んで欲しくない。もう一度言う。一緒に来てくれ。フューリーは、君達を歓迎する。」

アルヴァンは、カルヴィナに必死に語るが……。

メルアは、アルヴァンヴァンをキッと睨みつけた。

メルア「嘘です!!! ……死にます。 私達。 死んじゃいます。
あの人達に連れていかれたら!!!」

テナア「クーランジュ！ お願い！！ 指示を出して！！ 戦つて
よ!!!」

テナアがカルヴィナの体を揺すり、叫んだが、カルヴィナはまだ放心していた…。

カルヴィナ「…」

ジュアム「チー！！ 騎士様が殺れないなら、俺が殺してやるよ！
」

アルⅡヴァン「待て！ ジュアⅡム！！！」

ジュアⅡムは、猛スピードで気球に向かって攻撃してきた！

ニヤース「もうダメニヤ！！！」

テナア「畜生ッ！！！」

メルア「！！！！！」

ヴォン……！！

その時、突然メルアから出た謎の光が、カルヴィナ達の乗る気球を覆った！！

…ジュアⅡムの攻撃は、その光にすべて吸収された。

ジュアーム「チツ、…くそツ！ オルゴンクラウドのせいで、墮とせなかつたってのかよ!？」

ジュアームが悔しがる。

カティア「もしかしてこれが、メルアの特異能力なのでしょうが…!？」

ムサシ「そうね……。でも、何とか助かったけど、次にまた、さっきの攻撃が来たら……。」

メルア「ゴメンなさい……。さっきの技、連続して使うのは、無理みたい……。」

コジロウ「クツ、根本的状況は何も変わらんというわけか…!！」

とうとうテニアは、カルヴィナを揺するのを止め、やけくそになつて叫んだ。

テニア「く……!! ……クーランジュが戦わないなら、あいつらに連れて行かれるくらいなら、アタシは一人で戦って死んでやるよ!!
!! クソオオツ!!!!!!!!!!!!!!」

テニアが気球を降りて駆け出そうとした、その時……

カルヴィナ「…さない…。」

カルヴィナが、にわかに呟いた……

カティア「え……?」

カルヴィナ「許さない！！ 会社の皆を殺し、私も殺そうとした！！
アル＝ヴァン！！ 貴様が、特殊能力を持つテニア達が邪魔だというなら、意地でも私は、この子達を守ってやる！！ 貴様らの思い通りにさせはしないッ！！」

…カルヴィナは、本気で怒った。

カティア「クーランジュさん……」

ムサシ「逆上してるわ……。」

コジロウ「まずいな……。 あいつ、クーランジュの恋人だったのか……。」

カティア「メルア、テニア、あいつらを倒すわよ！！」

テニア・メルア「うん!!」

アル「ヴァン」それが君達の答えか…。 ジュアム。 ラースエ
イレムは使えない。 注意して戦うぞ…。」

ジュアム「はっ！ 了解しました!!」ダッ！

ムサシ「チッ！ 来るわ!! 行ってきなさい！ アーボ!!」

ムサシはモンスターボールを投げ、アーボを繰り出した。

コジロウ「テニア達を援護しろ！ ドガース!!」

つづいてコジロウも、ドガースを繰り出す。

そんな中、ニヤースは言う。

ニヤース「悪いけど、ニヤーは戦えないのニヤ。ニヤーは『平和主義』なのニヤ。」

コジロウ「へ…？ 何じゃそりゃ？」

ちょっとそれは、ゲームが違うのではなからうか。アイルーとか
がでてくるゲームではなからうか？？

ムサシ「……………つまり、『役立たず』ってことでしょ？ バトルの邪魔になるから、アンタは下がってなさい！…！」

ニヤース「……………ちょっとショック……………」

確かに役立たずなので、ニヤースは何も言い返せなかった。

バトル開始…

ジュアーム「へ！ テメエらが群れをなしても、俺達にやかなわねえことを教えてやるよー！」

テニアに、ジュアームが迫るー！！

テニア「なにをー！！」ゴオオー！

テニアは火炎放射を放った!!

…が、ジュアムはあさつさりと避けてしまった。

ジュアム「遅いんだよオ!!」

バキツ!!

直撃だ!!

テニア「キャアア!! ……クソッ! は、速い!!」

ジュアーム「ハハハ！　だから遅過ぎるって……グぁッ！？」

メルアが、ジュアームの死角から放ったハイドロポンプが、油断していたジュアームにクリーンヒットしたのだ。

メルア「……油断していると、こっちからも攻撃がきますよ……！」

テナア「メルア！　助かったよ……！」

ジュアーム「ク、クソ！　ナメた真似を……！」

ジュアームは、かなりの痛手を負わされたようだ。

この間は洞窟の中で戦ったため、テナア達は思うように戦えなかったが、今回は視界がひらけている。利はテナア達にあった。

その頃、ロケット団は…

ムサシ「コジロウ。 私達は、ジュアムとアルヴァンとかいう
奴の回りに居る雑魚を片付けるわよ!!」

コジロウ「わかった!!」

ムサシ「アーボ！ まきつく!!」

アーボ「シャアアアツ!!」

従士達「ぐわああっ!!」

コジロウ「ドガス、煙幕だ!!」

従士達「クソツ！前が見えない!？」

またその頃、カルヴィナは

カルヴィナ「どうした、アル＝ヴァン！！ 早く私を殺しにこい！
！ … 貴様が望んだことだろうがああ！！！！」

カルヴィナは絶叫した。

アル＝ヴァン「カルヴィナ…」

アル＝ヴァン（すまないカルヴィナ。私達がもっと早くオーキドを
発見し、あの三匹ごと消していれば、君はこんな思いをせずに済ん
だというのに…）

カルヴィナ「死ねええええッ!!」

アル＝ヴァン「何!!!?」

カルヴィナは、隠し持っていたショットガンで、アル＝ヴァンを徐々に追い詰めていった。

その射撃は完璧だった。

アル＝ヴァンは、カルヴィナから発せられる巨大な憎悪に一瞬恐怖さえ覚えた。

アル＝ヴァン「く…これ以上は…!!」

ジュアーム「ア、アルヴァン様…っ!!」

ジュアームも、テニア達の予想外の強さに、慄然としている。

アルヴァン「強い…！ 私とジュアーム以外は、全滅させられた
というのが…!!？」

そう、彼らの周りにいたはずの多数の従士達は、一人のこらさず血を
流し、死んでいたのだ。

ムサシとコジロウによって、殺されたらしい。

ムサシ「後は、あんた達だけだよ…。 覚悟するんだねえッ!!」

コジロウ「ボスの無念を晴らす!!」

今は勝てない……。
そう悟ったアル・ヴァンは、撤退を決心せざるをえなかった。

アル・ヴァン「……カルヴィナ、残念だが勝負はここで一旦お預けだ。」

カルヴィナ「なんだと！？ アル・ヴァンッ！ 貴様、逃げるのか！？」

アル・ヴァン「サイトロンも、今はろくにつかえない。君達も、無力な私達を殺しても気がすまなかつ。」

テニア「コイツらもサイトロンを使えるの……？」

アル・ヴァン「時が来たら、必ず、決着をつけよう……。その時まで、さらばだ……！」

「コジロウ」この野郎、待てッ！！」

ヴォーン！！

テニア「オルゴンクラウドで逃げたか…。」

カルヴィナ「フツ……待っているぞ、アル＝ヴァン……！　いつか私
が、この手で貴様の息のねをとめてやる……！！！」

暫くして、一同の興奮は少しずつ、収まってきていた。

ムサシとコジロウも、それぞれのポケモンをボールに戻していた。

だが、戦いが終わった後もカルヴィナは、明らかに殺気に満ちていた…。

テナア「クーランジュ…。大丈夫？」

テナアが心配し、カルヴィナに声をかける。

カルヴィナ「テナア…。大丈夫よ。私が憎んでいるのは、あの事故を引き起こしたフューリーよ…。あなた達は、ちゃんと自分の過去の過去について話してくれた。あなた達に当たり散らすことは無いわ…。」

カルヴィナはそうだったが、怒りはまだおさまっていない。

メルア「クーランジュさん……………」

カルヴィナ「しつこいわねッ！ 私がせっかく、当たり散らさないって言って我慢してるのに、そんなに八つ当たりされたいわけ？」

カルヴィナが、急に怒鳴った。
かなり精神が不安定のようだ。

メルア「…ごめんなさい…！！」

メルアは震えながら、カルヴィナに謝った。

コジロウ「すまん。俺からも謝る。メルアを許してやってくれ……。」

カルヴィナ「ふん……。」

ムサシ「ねえ……。ずっと気になってるんだけど……前から言ってるその例の事故って、何なの？」

ムサシが、核心をついた質問をした。

カルヴィナは少し嫌な顔をしたが、やがて、口を開いた。

カルヴィナ「ふう……。あまり思い出したくはないのけどね……。
いいわ、話すことにする。」

……

……

……

……

第8話「血塗られた過去」(前書き)

例のあの事故の、真相。

第8話「血塗られた過去」

私は、一度トレーナーを辞め、シルフカンパニーの姉妹社、『アシユアリー・クロイツェル』に入社したの。あいつの紹介でね……。

1年前：

二人の男女が、大きな施設の前に立っていた。ここは後に、『夢の跡地』と呼ばれることになる場所だ……。。

カルヴィナ「ここが、アシユアリー・クロイツェルね、アル＝ヴァン？」

アル＝ヴァン「そうだ。」

カルヴィナ「ふふ、私、上手くやれるかしら？」

アル＝ヴァン「大丈夫だ。君は凄腕のトレーナーだったのだろう？ ポケモンについて詳しい君なら、造作もない仕事だ。」

それを聞き、カルヴィナは微笑んだ。

カルヴィナ「嬉しいこと言ってくれるじゃない。でも、褒めても何も出ないわよ？」

アル＝ヴァン「ハハ、私は君の笑顔が見られるだけでも満足だよ。」

アル＝ヴァンも笑い返した。

カルヴィナ「アル＝ヴァン……／／／」

二人は、愛しあっていた。

実際、端から見ても、この二人は素敵なカップルにしか見えないことだろう。

カルヴィナは、アル・ヴァンとずっと一緒にいたかった。彼の側において、話しをしているだけでも落ち着けた。

しかし、カルヴィナはその気持ちを、アル・ヴァンになかなか伝えられなかった。

若いカルヴィナは、自尊心が大き過ぎたのかもしれない。

……こうして、私達はアシユアリーで働くことになった。アシユアリーでは、ある不思議な力を持ったポケモンの研究が主だった。

私は仕事のひとつとして、新米トレーナーである社員にポケモンについて教える教官もやったわ。

ジュアーム「カルヴィナ教官殿、ポケモンバトルの手合わせを願います。」

カルヴィナ「いいわよ。あなたも、結構慣れてきたわね。」

ジュアーム「光栄です！」

カルヴィナは微笑み、先に部屋を出ていった。

ジュアーム「……………」。

ジュアーム（ククク……………」。

私は、アシユアリーでの仕事に生きがいを感じていたわ。でも…、
そんな日々も終わりを迎えた…。ある日のこと…

…その日の、夕方であった。

カルヴィナ「さて、そろそろ定時だし、引き上げる準備を…。」

カルヴィナがデスクの書類を引き上げ、帰途につこうと廊下に出た、その時だ。 ブーツ！！ ブーツ！！

突然、警報ブザーが会社中に響き渡った。

カルヴィナ「？ 何事！？」

会社の研究員が、カルヴィナのもとへ走り寄った。

研究員「カルヴィナさん！ 大変です！！ 会社中のシステムが、原因不明の暴走を起こしています！！」

カルヴィナ「なんですって！？ 今どこの被害が大きいの！？」

研究員は息を切らしながら、カルヴィナに必死に伝える。

研究員「研究施設のブロックです！ セキュリティロボが暴れています！！ コントロールは不能です…っ！ システムの緊急停止も不可能！！ ……この広大な会社の敷地からの脱出も、難しい状況かと……！！」

研究員の顔は、真っ青だ。

カルヴィナ「なんてこと…!? あそこは実験用に、大量の爆発物があるのよ…? とにかく、あなたは社長と従業員全員をなんとか脱出させる方法を計算してッ!」

焦りからか、カルヴィナは怒鳴った。

研究員「は、はい!!」

カルヴィナ「私達、どうなるの…? ああ…、アル＝ヴァン…!!」

それから、数分も無かったわ。辺りがいよいよ爆発しだした…。避難なんか、間に合うはずもなかった。とうとう私は、意識を失った。

気がついたら……

これが、冒頭で省略されたカルヴィナの語りの全てである。

カルヴィナ「悪夢にうなされて、私は飛び起きる……」。

周囲の様子から、ここが病院であることを思いだした……。

また……あの時の夢を見てしまった……。

苦い思いが込み上げる……。

あの悪夢。

だがあれは、実際に起こったことだ。

私が空軍をやめ、彼の誘いで参加していた、イツシュ地方・アシユ

アリークロイツェルの『特殊ポケモン』研究プロジェクト。

そこで起こった事故は、システムの暴走による事故だった…。

今まで蓄積してきたデータ、ポケモン達、そしてそこにいた全ての従業員の命が、一瞬にして全部失われた…。

最初、医師から生存者が私一人だけだと聞かされた時、私は絶望を隠せなかった…。

仲のよかった女友達、社長、研究員、そしてなにより……

アル＝ヴァン。

ずっと、一緒にいられると信じて疑わなかった。

そんな彼も、もういない…。

…私は一人だ。

もうすぐ退院だ。

これからどこへ行こう？ 仲間の、彼のいない世の中で、生きていく必要があるのだろうか？

私は、優しくして、そしてどこか寂しそうだった彼の……アル＝ヴァ
ンの瞳を、忘れることができずにいる……

……

……

……

ムサシ「まいったわね……」

話しを聞き終え、ムサシが唸った。

カティア「前テレビであったニュースじゃ、詳しいことは言っていなかったけど…、そんなことがあったの…。」

メルア「クーランジュさん…。」

カルヴィナ「みんな…、みんな、死んだんだ…。あの事故じゃ私以外、誰も助からなかったんだ！！」

なのに、私一人だけが生き残って…。それが、全部あいつが指示してやったことだったなんてッ！！」

テナ「クーランジュ…。」

カルヴィナ「私が今まで、いつもあんな態度だったのは、そんな苦しい過去が忘れられなかったからよ！　こんな過去を背負い続けるくらいなら、私は死んだほうがマシだって何度思ったことか…！　それが、何！？　アイツは…、私には何ひとつ、本当のことを言わなかった！！　地球軍の大尉という身分だって、全てつくりもの！！」

カルヴィナはそこまで話すと、一旦口調を落ち着け、続けた。

カルヴィナ「もう死ねない……。私は何としてでも生きて、あいつを殺す！！ あの日、死んでいった仲間達の無念をはらすために！！」
結局、正義なんてものはあてにならないんだッ！！！」

ムサシ（この女……）

コジロウ（なんだよ……。クーランジュ、なんかおかしい。気持ちが悪い……。）

カルヴィナ「……あいつ……。どんな殺し方をしてやるうかしら……？
少しずつ苦しませながら……？」

喉元をかつ切って、内蔵でもほじくり返してやるうかしら……？
フフ、ハハハ……！」

カルヴィナは、急に高笑いを始めた……

テニア「ッ!？」

それを見たテニアは、背中が凍りつくような感覚を覚えた。

カティア「クーランジュさん!!」

カティアとメルアが心配し、駆け寄ろうとしたが、ムサシがそれを制止した。

ムサシ「あなた達、止めなさい！」

メルア「どうして！？ クーランジュさんが、おかしいんです！
今すぐにでも、ハナダシティの病院に……！」

ムサシは首を振った。

ムサシ「クーランジュは今、精神が不安定過ぎるだけよ。 今まで、
よほど怒りを抑えてたのね……。」

私の携帯している医療キットの中に、鎮静剤があるわ。 それを
打って、休ませてあげれば大丈夫のはずよ。」

ムサシは以前、ラッキー達と正看護師の資格取得を目指していたの
で、医療の多少の知識がある。

テニア「……うん。 わかったよ、ムサシ。」

テニアは、カルヴィナをそっと思つた。 ……今のカルヴィナの近くにいると、息苦しい……。 少し、彼女とは距離をおきたい……。

テニア（……………）

だが、テニアは酷くカルヴィナを心配していた。 ……また、カルヴィナが最初の頃のような冷たい態度に戻ってしまったらどうしよう。 と。 テニアは、三匹の中で一番カルヴィナのことを心配していたのだ。

テニア（クーランジュ……。 せつかく、少しずつ明るくなってきて

くねっていたかと思っただのよ……。アタシ……………)

第9話「豪華客船？ サントアンヌ号！」（前書き）

批判の感想をいただきました。

確かにこの小説は、面白くないかもしれません。でも、初めての作品ですから、至らぬところも大目に見てくださいると幸いです。

第9話「豪華客船？ サントアンヌ号！」

テニア「クーランジユ、大丈夫…？」

木陰で休んでいたカルヴィナに、テニアが声をかけた。

カルヴィナ「ええ…。少しは落ち着いた。…さて、この町に
来た目的は、あいつらを倒す協力者を探すことだったわね？ 港
のほうならば、まだ生き残りがいるかもしれない…。行きましょ
う。」

カルヴィナは、低く、押し殺したような声で言った。

テニア「…っん。」

そんなカルヴィナとテニアのやり取りを横目で見、メルアとカティアは押し黙った。

メルア（まだ、クーランジュさんから完全に殺気が抜けきっていない…。 次またあの敵が出てきたら、クーランジュさんは……………。）

カティア（これじゃまるで…。 最初の頃のクーランジュさんだわ……………）

一方、ムサシとコジロウは、ニヤース気球の修繕におわれていた。

ムサシ「ジュアとかいう奴の攻撃のせいで、気球が壊れたわ……………」

ムサシが、顔を曇らせる。

コジロウ「メルアの出した、バリアみたいな不思議な光のお陰で、命は助かったんだがな…。結局、何だったんだ？ あの光。」

メルア「私、皆を守らなくちゃと思ったら、自然にああなって…。」

そこへ、テニアとカルヴィナが歩いてきた。カルヴィナも、もう普通に歩けるようになっていた。

テニア「どうやら、メルアの特異能力は、『オルゴンクラウド』みたいだね。フューリーがそれを使ってワープしたのと同じ能力だよ。」

メルア「え？ あれが…？」

テニア「私も、『ラーズエイレム無効』と若干の『未来予知』ができるようにね。」

カティア「それで、オルゴンクラウドって、具体的に何ができるの？ テニア。」

カティアが質問した。

テニア「アタシが未来予知で見たのは、オルゴンクラウドは……」

- ・自分の周囲を覆うことで、ダメージを軽減する。
- ・短距離の瞬間移動（転移）ができる。

……ことがわかったよ。」

気球の修理をしながら話を聞いていたムサシが、目を光らせた。

ムサシ「凄いじゃない!! その瞬間移動ってのを使えば、気球なんて用無しじゃない」

何とも嬉しそうだ。 面倒臭い気球の修理なんて、彼女も出来れば、したくはない。

だが、メルアは険しい顔をした。

メルア「…うん。」

カティア「どうしたの?」

メルア「さっきから、試しに瞬間移動を使ってみようとしてるんですけど…。できないんです…。」

「コジロウ」…へ?」

カティア「なんでかしら…?」

テニア「うん…。きっとメルアは、まだ完全に能力に覚醒できてないんだよ。訓練しないと。」

そのとき、今まで黙って聞いていたカルヴィナがメルアに向き直り、口を開いた。

カルヴィナ「…使えないわね。あんだ。」

テニア「ク、クーランジュ!？」

テニアは衝撃を受けた。

まさか、カルヴィナがそんなことを平気で言うとは思わなかった。

だが、最もショックであったのはメルアだ…。

メルア「…、ごめんなさい…クーランジュさん…私…役に立てなくて…。」

ムサシ「ちょっと!! クーランジュ! 言い過ぎよ!! 当たりちらさないって言ったじゃない!」

カルヴィナ「一応、私はこいつらのトレーナーだね。あんたに口だしされる筋合いは無いわ。」

ムサシ「くッ!」

ムサシは黙った。

不快だったのだ。　カルヴィナの、テニア達に対する呼び方が、『あなた達』から『こいつら』に変わったのだから。

カルヴィナは、テニア達を、復讐のために使える『道具』として見るようになってしまっていた。

…カティアは、カルヴィナに対して、内心はらわたが煮え繰り返っていたが、あくまで冷静を保ち、カルヴィナに告げた。

カティア「クーランジュさん、あなたの今の気持ちはわかります。だから、ひとついわせて？」

カルヴィナ「何よ？」

カティア「私達は、オーキド博士から貴女へのパートナーです。だから、私達は貴女とずっと一緒です。貴女と同じ道を歩みます。たとえば、それが破滅に向かう道だったとしても…。私達は貴女について行きます。」

カルヴィナ「…何がしたいの？」

意味がわからず、カルヴィナはカティアを睨んだ。馬鹿にされている、と錯覚したのだ。

カティア「貴女は今、迷っています。トレーナーの迷いは、私達ポケモンにも影響があります。でも私達は博士からもうひとつ特殊な物を貰いました。

…人の心を読み、進むべき道へ導く能力です。貴女には迷いがみえた。たとえば、復讐に駆られていても、進む道だけは誤らないでください。…今はただ、それだけ言っておきます。」

カルヴィナ「…何よ…それ…。」

カルヴィナは、何も言い返せなかった。

ムサシ」「……」

ニヤースが、重くなった空気を執り成そうとする。

ニヤース「気球の修理は多分、短時間じゃ無理ニヤ。グズグズしていたら、またフューリーが来るかもしれニヤいし……。移動手段が消えてしまった。これからどうするニヤ？」

ニヤースの質問に、コジロウが答えた。

コジロウ「それなんだが……。」

コジロウ「ちょうど今頃、このクチバシティの港に、俺の知り合いが来てるはずなんだよ。訳を話せば、力になってくれるかもしれない。」

ムサシ「誰なの、それ？」

コジロウ「サントアンヌ号の船長だ。」

ムサシ「ぬうわんですって〜!?!?」「ゴロリンゴロリンゴロリン」
!?!!

ムサシは仰天し過ぎて、三回連続でんぐり返りをしてしまった!

メルア「ヒッ!? どうしたんですか?」

さすがのメルアも、そんなムサシには度肝を抜かれた。あまりにも阿呆すぎる。

ムサシ「さ、サントアンヌ号って、あの豪華客船の!? その船長と知り合いですって〜ッ!?!?」

カティア「な、なんだか、凄そうですね…。」

テナ「豪華客船か…どんな料理があるんだろ…？ フフフ…。」

さっきのカルヴィナの悪態も忘れ、食べ物のことばかりが頭に浮かぶテナ。 まあ、毎度のことなのだが。

メルア「…テナちゃん、ヨダレ出てるよ…。」

カルヴィナ「協力が得られるというなら、何でもいい。行くわよ…。」

カルヴィナは相変わらず冷たかったが、もうテナ以外、だれも気に止めてはいなかった。

ムサシ「それにしても…。」

ムサシが遠くを見るような目で呟く。

ムサシ「豪華客船の船長…。」

テニア「料理…。」

ニヤース「いつたいどんなのがニヤース？」

港

カルヴィナの予想通り、港は町から離れていたおかげで、フューリーの襲撃を免れていたようだ。

しばらく行くと、大きな船が停泊していた。おそらく、これがサントアンヌ号だろう。

カルヴィナ達は、船へと続く大きな棧橋を渡った。

船乗り「ん？誰だお前ら？」

ムサシ「へ？え、え」と。

いきなり名前を聞かれ、焦燥に駆られるムサシだったが、コジロウがすまして、船乗りに聞いた。

コジロウ「僕の顔を知らないかい？」

その声を聞き、コジロウの顔をみた船乗りは、仰天した。

船乗り「…！？ ま、まさか貴方様は、コジロウ坊ちゃまでは…？」

コジロウ「知っていて貰えて、光栄だな。今日は船長に会いに来ただけど？」

船乗り「だ、大歓迎ですよ！ ささ、どうぞ船内へ！！」

一同「……コジロウ、何者…？」

コジロウ「まあ、他よりちょっとお金がある家に住んでただけだよ。

」

ムサシ「私と全く逆の人生を歩んできたってわけね…」

カティア（あのハナダシティで下ネタを言いかけたたコジロウさんが……！？ シンジラレナーイ！）

カティアは頭を抱え込んでしまったが、テニアはそんなカティアをよそに…

テニア「まあどうでもいいじゃん！！ ご飯ご飯」

テニアは根に持たないタイプの女の子であった。

メルア「もう、テニアちゃんたら…」

一同は、まずは食堂へ通された。

テニア「ヒヤッホウ〜!!!!」ダッ

テニアは他のみんなをおいて、ダッシュした!!

コジロウ「お、おいおい落ち着けよ………(汗)」

食堂

先に到着していたテナアが、何故か野生化していた！！

テナア「うおおらあああ

ゑ%

*！！！！！！」

ドカツ！バキツ！！ガシヤアアア〜ン！！！！！！

メルア「きゃああ！ テナアちゃん何やってるの！！！！？」

テナアはメルアの問いには無反応で、暴れ続ける！

カルヴィナ「く、我を失ってる？ 一体、何故！？」

そこへ、厨房から出てきた料理長！

料理長「！？ なんだい！？ この有様は！！！」

傍らのコックが、青ざめた顔で説明する。

コック「それがあの人、夕食が『秋刀魚の塩焼き』ってジョークを言ったら、急に怒り出して……。」

料理長「クソ！ あんた、なんてことをしてくれたんだい！！ あのヒトカゲ（？）、完全に我を忘れて暴走している！！ こうなったら、ポケモンバトルで止めさせるしかないよッ……！」

アキト「待って下さい！！！」

一人のコックが歩み出た！

料理長「テンカワ・アキト…？ あれを止められるのかい…？」

アキト「任せて下さい！！ 俺の特製火星丼を食べさせれば…！！」

アキトと呼ばれたコックは、バク転しつつテニアに突撃！！

カルヴィナ「…！？ バク転してるのに、ドンブリから具が落ちない…！！？」

アキト「うおおお！！ 俺の作った火星丼で、正気になれえええ！！！！」

やったあ！！！！
火星丼を食べさせたあッ！！！！

テニア「…！？ ぐおお！？」ガツガツ

料理長「あのヒトカゲ、アキトの火星井をおいしそうに食べている
！？」

……。

テニア「ゲプ…あれ？ アタシ、なにを…？」

満足し、テニアが元に戻ったようだ！

コック達「うおおお！！ よかった〜！！」

メルア「テニアぢゃああん!!!(号泣)」

テニア「うわ、メルア、顔中が凄い鼻水だよ!(汗)」

…全てを見届けた料理長は、アキトに向き直り、優しく微笑んだ。

料理長「アキト…お前さんはもう、立派な一人前だよ…。」

アキト「料理長…! ありがとうございます!」

隅っこに、話について行けないカルヴィナがポツン……

カルヴィナ「…何、この小説…？」

テニアも落ち着いて、アキトが言った。

アキト「まあ、せっかく来ていただいたお客さんだし、ご馳走するよ？」

その声を聞き、カルヴィナはビクンと反応した。

カルヴィナ（…きのせいかしら…？ニビのタケシの阿呆と、声が似

てるきがするんですケド…。」

カティア（てか、料理が上手って特徴なあたり、そのものなんじゃ…？）

メルア（あまり関わりたくないです…。もしこの人が助平な性分だったらと思うと…。）ゾクゾク

カルヴィナ「…遠慮するわ。悪いけど…。」

カルヴィナは頬を引き攣らせ、苦笑いで断った。

アキト「え！？ そんな。せつかく作られた料理が泣くよ！！！」

ムサシ「…ッ！」

そんなアキトの叫びに、何故かは知らんが、ムサシが過剰に反応した！

ムサシ「ふざけなさんな！！ 食べ物に心があるものかよッ！！
ものに命はねえんだよ！！！！！！」

なんで、この自称女優のオバハンはここまで怒る???

カルヴィナ「『忍ペンまん〇』の“現神の術”じゃあるまいし、ねえ。」

「
テニア「カルヴィナ…、その〇はあまり意味を成さないと思うよ…。」

カルヴィナは、この手の漫画やアニメは大好きで、漫画本は既に絶版になってしまっているのに、なにげに全巻しっかり持っていたり、

当然アニメも全話見ていて、バッグの中にはいつもグッズを忍ばせていたりと、いわゆるヲタクの領域であった。

ムサシ「てゆーか『忍ペンまん〇』懐かしすｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

コジロウ「『忍ペンまん〇』ってなんだ？」

…このグダグダムードに耐え切れなくなってきたカティアが、こめかみに青筋を立てた…。

カティア「…やめて下さい。これ以上話を脱線させるのは。著
作権的にも紹介はできないんですよ。メタな話。」

コジロウ「…なんかすみません。」

コジロウはカティアの黒オーラを感じ、土下座した。

カルヴィナ「やれやれ。 しょうがないわね。」

メルア「まったくです……………っつて、もとはといえば、クーランジユ
さんが言い出したんでしょっ！」

ギヤー ギヤー……………

遠くで、アキトは自分の作った火星井を、寂しそうに口に掻き込んでいた。

アキト「置いてきぼり、悲しい……………」

食事も済ませ、船長に会いに行くことになったが、広すぎる船内のため、カルヴィナ達は道にまよってしまった。

船室

ジェントルマン「……………」

ジェントルマンが、何かを見ている……………。

…と、そこへ

ガチャ

カルヴィナ「ごめんなさい。 船長室はどこか知りません？」

カルヴィナ達がぞろぞろと入室。

ジェントルマンはギョツとした！

ジェントルマン「な、な、なんじゃ！？ ノックもしないで！！！！」

テニア「…何？ この慌てよう？」

そりゃ、擬人化が三匹と、大のおとながノックもせずいきなり部

屋に入って来られるのは、仰天するのも無理なかつ。

…が、この慌て方はそれとは違つ…！

テナアのサイトロンが反応したのだ。

それを聞き、ムサシがじじいににじり寄る。

ムサシ「怪しいわね…。 ちょっと！ 持ってるものを見せなさいよ！」「ガバッ

ジェントルマン「嫌ああ！！ それだけは…／／／」

写真集………？

メルア「きゃ！！ うわ…、ホモな本ばかりですう…／／／」

メルアが顔を赤らめた。 …まさか、その気があるのだろうか…？
メルアは。

ニヤース「キモス。」

カティア「こんなことだと思いましたわ…。」

ムサシ「有りがちだよね。」

カルヴィナ「テニア？ じじいごと燃やしてもらえる？」

カルヴィナは笑顔でテニアに命令した。

当然、反論する者はいない（笑）

テニア「了解！！」

ゴオオオ！！

ジエントルマン「ぎいやああああああ………！！！」

見事に焼かれてしまった、変態その3。

カルヴィナ「じじいも焼き払ったし、とっとと船長室へ向かいましよう。」

カルヴィナは相変わらずのスパスパぶりだ。

そんなカルヴィナを見て、テニアは少し、ホッとしていた。

テニア（よかった。少しずつだけど…、前のクーランジュに戻ってきてるのかな…。）

…だが、テニア自身わかっていた。また、フューリーのあの敵が出てくれば、カルヴィナは怒り狂うだろう。それを思うと、テニアは妙に悲しくなる。

テナリア（カルヴィナに昔、酷い仕打ちをした、フューリーの騎士アル＝ヴァン。…絶対に許さない…！！）

船長室目前

カルヴィナ「どつやらここが、船長室のようね。」

ムサシ「船長…。どんな方かしら…？／＼／」

ムサシは勝手に、妄想を始めてしまっている（汗）

メルア「楽しみですね」

カルヴィナ「さあ、ドアを開けるわよ！」

ガチャ…

カルヴィナ「？ 鍵がかけてあるわ。」

メルア「えい！」

バシヤー！！

メルアのハイドロポンプでドアが破られた！！

メルア「ふう。 さ、会いに行きましょう」

一同「ポカーン……」

コジロウ（もうわかってることだけど、無茶苦茶だな……。）

とは思いつつ、全員バツチリ開いた穴から入室！

船長「……」

部屋の中で、船長はドアに対して背を向ける形で座っていた。

メルア「こんにちは……私達は……」

船長「……う……う……」

カルヴィナ「!? 船長!？」

船長が突然、苦しそうに呻きだした!

コジロウ「何かあったのか!？」

テナ「ま、まさかフューリーが!？」

カルヴィナ「くそおッ!!!」

カルヴィナ達は、慌てて船長のもとへ駆け寄る。

しかし……

ニヤース「あのおく、ちょっとニヤーの話しを…(汗)」

ムサシ「どしたの、ニヤース!?! 今は話しどころじゃないでしょ!
! あんたって本当にKYよねッ!」

ムサシがニヤースをギロリと睨む。

ニヤース「いや。 船長はただ、ゲロ吐いてるだけみたいだニヤ…
…」

……。

カルヴィナ「…は？」

テニア「ん〜……？」

テニアは、船長の顔を覗き込んでみた。

テニア「…うわマジだ、きめえ！」

テニアが船長から飛びのいた。

ムサシ「げ、幻滅…。」

メルア「しかも、あまり顔わよくないですう…。」

テニア「メルアもいうねえ〜」

テニアがケタケタと笑った。

……失礼にも程があるだろ、あんたら。

船長が、ふとコジロウの姿を見つけた。

船長「う…貴方もしや、コジロウ坊ちゃま…？」

船長の目が輝いた。口から何かを出しながら、だけど。

コジロウ「久しぶり、船長。 てか大丈夫…？」

船長「なんの…げおええ！ おお…、…コジロウ坊ちゃまも、大き
くなられてえおうげえ〜！！！！！！」

大丈夫には見えない。 二日酔いだろっか？

カティア「…キモいぞいますわ。」

カティアは、ゴミでも見るような目で船長を見つめている。(笑)

船長「すみません…、背中をさすっていただけませぬか…？ 船酔いが酷くて…。」

ゲツソリした顔で懇願する船長。

カルヴィナ「船の船長なのに、船酔い？」

カルヴィナは、目が点になった。
なんと滑稽な話だろう。

テニア「誰がじじいの背中なんかさするアル!？」 自分でやるヨロ

シー！」

メルア「テナアちゃん…？ 何故にいきなりその口調になったの？」

特に意味はない。

カルヴィナ「さすってあげましょう。ここに来た目的は、フューリーと戦う協力を頼むためなんだから。くたばってもらっては困る。」

船酔いでくたばった人はいません。

ムサシ「じゃ、みんなで交代しながらさすってあげましょ。」

……う、あげええ！

……くすくすくすくす……

……オエー！……

……くすくすくす……

……くすくすくす……

船長「やあ！　ありがとう君達！　お蔭様で、助かったよ。」ケロ
リッ

一同（漣えキタネエもん見ちまった…。）

なんで、あんなものが吐き出されたんだろう…！？　船長は口頃、
あんなものを食べていたというのか！？　（謎）

意気消沈するカルヴィナ達…。

コジロウ「…そ、それより船長、頼みがあるんだよ。　実は……」

.....

船長「なる程な……。フューリーに対抗できる程の戦力が欲しい、
ですか……。」

船長が考えこんだ。

カルヴィナ「何か、宛はないの？」

船長「うむ、そうだな……。ノヴィス・ノアから、ブレン〇ワ
ドを借りてくるか……。」

また、著作権的アニメの話しを引っ張り出しやがる…。

カティア「…なんか事態がもっと面倒臭くなる気がするので、それは止めて下さい。」

カルヴィナ「同感。」

船長「そうか。」あっさり

ありがとう、カルヴィナ、カティア！
止めてくれたことを作者はとても感謝するよ。

コジロウ「…なにか、戦力増強出来そうな手段は知らないのか？」

船長「うむ…君達、ヤマブキシティを知っているね？」

カルヴィナ「当たり前じゃない。」

カルヴィナは馬鹿にするなとばかりに言い放つ。

船長「これは極秘だったんだが……。あそこは、フューリーが占領していることが明白になった……。」

一同「!!！」

船長「しかもシルフは、乗っ取られた挙げ句、今は地球人を掃討するための機動兵器を準備しているのではないかという情報も入っているのだ。そのために、今はまだあまりフューリーの攻撃は本格化していなかったが……。それも時間の問題だ。クチバが壊滅したように……。いずれはカントー……。いや、全ての地方の町が滅ぼされるだろう……。機動兵器が完成すれば、すぐにでも奴らは本格的に地球人を刈り始めるはずだ……。」

事態はすでに、君達の思っている以上に深刻だよ……。」

メルア「そんな……。」

カティア「今までは、生身の奴らが相手だったから、なんとか戦えたけど……。」

テニア「機動兵器なんかに乗って来られたら、ひとたまりもないよ……。」

ムサシ「そうね……。」

三匹とロケット団は、いつきに弱気になってしまった。

……が、カルヴィナは違った。

カルヴィナ「……なるほど、ね。」

テニア「……え？」

カルヴィナ「私達に、そんな話をするってことは……。要するに船長は、私達にそこに潜入し、奴らの機動兵器のいくつかを奪えといってるんでしょう?」

テニア「え!？」

船長「御明察だ。かなり難しいが、もし成功すれば、まだ希望はある……。」

船長は難しそうに言った。

だが。

カルヴィナ「…やりましょう。」

カルヴィナはあっさり言い切る。

ムサシ「そんなことが可能なの!?!」

カルヴィナ「…忘れたの? ムサシ。この子達の特殊能力を。」

ムサシ「……あ!」

ムサシはカルヴィナの言わんとしていることを悟った。

メルア「そうでした!?!」

テナア「アタシの『ラーズエイレム無効化』と『近未来予知』!」

メルア「私の『オルゴンクラウド』!」

カティア「私は……。まだ何もないけど……。…（汗）」

コジロウ「確かに！ これを上手く使えば……。…！」

全員「目に、希望の光が差した。」

カルヴィナ「ね。行けそうですね？」

船長「なんと……。…」

テニア「ようし！！ そうと決まれば、自分の能力を鍛える必要があるよね……。…」

メルア「わ、私もオルゴンクラウドの瞬間移動の練習をします！！」

カルヴィナ「ええ…！ 皆、行くわよ…！」

…カルヴィナは復讐のため。

テニアはカルヴィナのため。

カティアとメルアはオーキド、

ムサシ、コジロウ、ニヤースは、サカキの仇を討つために…！

一同「オー…！！（オエエ…）」 船長「

……それにしても、食堂では何故かアキトが出てきたし、船長はあれだし、何一つこの船からは『豪華客船っぽさ』を見いだせなかつたな……。……。

と思うニヤースなのでした。

ニヤース「今の文章、ニヤアの考えかよ!？」

つづく!

第10話「ふたつの道への『分岐点』」(前書き)

今回は、少し短め。

第10話「ふたつの道への『分岐点』」

テニア「それにしてもあの船長、汚かったよね。」

カティア「まったくですわ。」

カティアが首を大きく縦に振る。

その時カルヴィナが、ふと、あることに気付く……！

カルヴィナ「……トキワの『酔っ払いじじい』、ジェントルマンみたいな『ホモじじい』、船長の『ゲロじじい』で、三拍子そろったわね……！」

ニヤース「……………」。

本当に、どーでもいいことだった…。

ムサシ「嫌な三拍子ね……なんか。」

ムサシが苦い笑いを見せる。

いや、普通にキモいであろう。 そんなじいさんは。

メルア「…そういえば、ゲロじじ……コホン、船長さんから、移動手段として、じてんしゃの『引換券』をもらったんですが……。」
ピラッ

ムサシ「一台分の券しか無いんじゃ、意味無いじゃん……。」

そう。カルヴィナ達は全員で七人いるのに、自転車一台では、あとの六人は結局歩くことになる。当然、主導権的に、乗るのは力

ルヴィナだけになってしまいそう。

コジロウ「しかもこれ、ハナダシティまで俺達が引き換えに行けっ
てことだろ？ズボラにも程があるぜ…。」

カティア「まったく…。」

一同、やる気がた落ちた。

カルヴィナ「いつまた、フューリーが来るかわからないから、気球
をのんびり修理する余裕もないし、これからは歩いて移動するしか
ないわね…。」　　急ぎましよう。」

歩きながら、カルヴィナは他の皆に説明を始めた。

カルヴィナ「ま、それはともかくとして……船長から聞いた情報だとまず、タマムシシティにフューリーの部隊が潜んでるらしい。

奴らがまた動きだして、クチバの二の舞いになってしまっまえに、なんとかしたいところね。

あと、シオンタウンにはテニア達の修業にもってこいなスポットがあるらしいわ。それに、シオンもいつフューリーに襲われるかわからない。なるべく早く駆け付けてあげたほうがいいのは事実……。

でも、この二つの町は反対方向よ。 どちらから向かおうかしら……。」

テニア「ていうか、そのシオンタウンのスポットって……ポケモンタワーだとか言わないよね……?」

テニアが顔を曇らせた。

カルヴィナ「あら、知ってるのね？　なら話が早いわ。」

カルヴィナが頷くと、テニアはいよいよ怯えだした。

テニア「……！！　いけねえ！！　クーランジュ！　あそこだけは
いけねえ！！　あんなとこ行った日にはアタシら、生きて出れねえッ
！！」「うるうる

テニアは半泣きしている。

メルア「テニアちゃん？　なに涙目で震えてるの？」

テニア「う、うるさい……　こっち見んな……！」

テニアとメルアのやり取りを見つつ、ムサシは自分の知ってるポケ
モンタワーの情報を語り始めた。

ムサシ「私らロケット団も、あそこの『ポケモンの笛』とかいうお宝を狙ってたんだけどねえ……。幽霊が出る塔だし、あそこのBGMは怖いしで、手が付けられなかったのよ。」

情けない軍団だこと。

カルヴィナ「ふうん……。もしかしてその笛って、念雅流の…ムサシ「ノオオオツ！！」

カルヴィナの言葉をムサシが血相を変えて遮った！

ムサシ「違うわよ！ ポケモンを眠りから覚ます笛よ！！ さっきのアニメ話を蒸し返すんじゃないわよツ！！ ねえ、なんで！？ なんてそんなに、あの忍者ペンギンに執着するの！？ あんたが好きなのは解るけど、今どきの子供にはもうわからないネタなのよ！！！」

しかし、カルヴィナ様はなんの反省もしない。

カルヴィナ「ふッ。 知ったことじゃないわ。 馬鹿が。」

カルヴィナの、「いはる」!!

ムサシ「むかつくうううッ!!」

コジロウ「ま、まあまあ!!」

ニヤース「落ち着くニヤ!!」

コジロウとニヤースが何とか二人をなだめる。

そんな風景を、一人優雅に眺めるカティア。

カティア「…ふう…醜い喧嘩…。」

ムサシ& a m p・カルヴィナ「なんか言ったか…？」ギロツ！

聞こえてたあああ！！

カティア「ひいいい！？ ぐ、ごめんなさあ〜い！！！」

カティアは咄嗟に二人に土下座した！

カルヴィナとムサシから、殺されると思う程の殺気を感じたらしい。

……そこへ、今まで半泣きしていたテニアが話しに割り込んできた。

テニア「…ねえ、一つ提案があるんだけど……」

カルヴィナ「む？ 申してみよ。」

テニア「一時的に、部隊を二つに分けない？」

カルヴィナ「ッ！！」

カティア「！！！！！！！！！！」

メルア「ッ！！　ッ！？　ッ　　！！？」

コジロウ「お前ら、いきなりどうした！？」

カルヴィナは、我が耳を疑った。

カルヴィナ（…なんてこと…！？　こいつ、スパロボではお決まりの、まさかのシナリオ分岐を促した！？）

カティアも悩んだ。

カティア（面倒臭いのよね…。あれって、戦力落ちるし、いつの間にか勝手に反対側のルートの奴らがどっかの敵勢力を潰したりし

て、話が見えなくなるし……。)

メルアは、眉間にしわを寄せまくっていた。

メルア(しかもテニアちゃんの為だけにわざわざ分歧するのよね……)

三人が頭を巡らせている中……。

ムサシ「いいんじゃない？ 面白そうだし。」

ムサシがあっけらかんと言った。

カルヴィナ（な、なんだとこのアマ！？ ……くそお、スパロボを知らないから、よくもそんな無責任なことが言えるッ！！）

そんなカルヴィナの思考を無視し、コジロウが付け加える。

コジロウ「そうだな。ここから歩いて、皆でシオンタウンまで行くのは機動性に欠けるし、フューリーに見つかりやすくなってしまふ。それに、フューリーの機動兵器が完成する前にヤマブキに潜入するなら、あちこち廻っている時間もないからな。」

見事なまでの正論だ。

カティア（…チ、コジロウの分際で、なんて正論を…！！）（黒）

テニア「だよね、だよね！！ じゃ、早速要員を振り分けようよ！

「！」

……もうだめだ。ストーリーの流れには、逆らえないのか……。

三人は、そう悟らずをえなかった。

カルヴィナ・カティア・メルア「ガクッ……」

カルヴィナ「仕方ない……。ま、いいわ。じゃあ、どっ分けてあげようかしら？」

カルヴィナが頭を巡らせる。

分岐の時は、片方のルートに戦力が集中してしまわないよう、慎重に人員を振り分けなくてはならない。

ムサシ「私とコジロウの手持ちは、アーボとドガスよ。」

カルヴィナ「両方同じ、毒タイプね。」

コジロウ「だって毒タイプって、俺達クールな悪役に似合ってるね？」

コジロウが胸を張って言う。

カティア「そ、そうでしょうか…？」

カティアが怪しそうな顔をした。

おそらく、「クールな」の部分を訂正したいのだろう。

カルヴィナ「…じゃあ、二人は別々で決定ね。タイプが偏るのはマズイから。ムサシがシオンタウンルートに、コジロウがタマムシルートにまわって頂戴。」

コジロウ「ムサシ…ッ!! さよならあ…!!」

ムサシ「コジロウ…ッ!! 寂しいわ…!!」

馬鹿だ。

カルヴィナ「…はいはい、ワロスワロス。じゃあ次は…、カティアとメルアはもちろんシオンタウンね。あんたらの為に修業する必要があるんだから。」

テニア「アタシはもう完璧に能力を使えるもんね」

テニアが鼻糞をほじりつつ、二匹を見下した。

カティア「…イラッ」

メルア「…頑張ります…（…#）」

カルヴィナ「私は、テニアと一緒にタمامシルートにまわるわ。
…フューリーを片付けてやる…。」

そこへ、ニヤースがヨチヨチと近づいてきた。

ニヤース「…ニヤーはどっちにするのニヤ…？」

カルヴィナ「ん…？ ああ、あんた居たのね。 あんたは特に戦力にならないから、適当に決めなさい。」

ニヤース「！！」

それを聞いたニヤースはショックを受け、思わず叫んだ。

ニヤース「なんニヤ！？ その態度は！！！！ ニヤーを馬鹿にするニヤー！！」

カルヴィナは面倒臭そうな顔になった。

カルヴィナ「チツ…。 いいわ。 あんたは私と逆のルートにまわりなさい。 枯木も山のにぎわいっていうし。」

ニヤース「…うう…。」

ニヤースはいよいよ泣き出してしまった。

ムサシ「あゝ、うるさいわよニヤース。」

ニヤース（ニヤースの立場って……）

そして……

いよいよ、分かれ道だ。

ムサシ達は地下通路を通って一旦八ナダ

シテイへ戻り、シオンを目指す。

カルヴィナ「では、あとはよろしく、ムサシ。」

テニア「しばらくバイバイだね、皆。」

メルア「テニアちゃん達も、気をつけて！」

カティア「私達も修業してきます。ムサシさんと一緒に。」

ムサシ「ま、しばらくは、私がこの子達のクーランジュの代理になるわけよね。ビシバシいくわよー！」

ムサシが張り切る。

ニヤース「……」

ムサシ「あなた、なにいじけてんのよ？い く わ よー！ー！」

ズザザザザ……

ニヤース「……」

テニア「ひきずられていったね。」

カルヴィナ「少し言い過ぎたかしらね？」

コジロウ「少しどろろじゃねえって……」

コジロウが飽きれかえった。

次回からは、それぞれの組のお話が1話ずつ交代で描かれます。

なお、カルヴィナの言っていた『シオンタウンルート』と『タマムシルート』については、タイトル上では、前者を『ムサシルート』、後者を『カルヴィナルルート』と呼ぶこととします。

ムサシルート11話「シオンへの道のり」(前書き)

いきなりですが、ごめんなさい。

なんだか、今日はヤケにスランプ気味で、ただでさえ酷い文章が尚更突拍子もなくなっています。

例えば、ジャリボーイが顔見せがてら、ムサシ達にいきなり、からんできます。

それに、今回はカティア好きの方に怒られそうな話を書いてしまった……！

カティア「何をやった貴様あ!？」

ムサシ「ふむ……、ジャリボーイが来るのか。」

ムサシルート11話「シオンへの道のり」

カルヴィナと一時的に別れ、薄暗い地下通路を歩くムサシ達。

ムサシ「さて、早いところハナダシティに戻って、イワヤマトンネルからシオンタウンを目指しましょ。」

カティア「貴女についてゆくだけですわ。」

メルア「よろしくお願いしますね、ムサシさん！」

しかしそんな中、ニヤースは一人考えごとをしていた。

（なんかみんな、とんでもない事を忘れてしまっている気がするんだけどニヤ…。）

ニヤースの疑問の正体は、次回明かされることになるだろう……。

.....。

.....

.....

それはともかく.....

沈黙の時…。

ムサシ・メルア・カティア（…なにを話せばいいかしら？）

メルア（話のネタが思いつかないですう……。）

カティア（困ったわ…。いつも最初に話を振ってくる人達（毒舌女と蜥蜴女）は今はいない…。話のキツカケがない…！）

メルア・カティア（絶望的だわ…ッ！！）

とうとう堪えきれず、カティアとメルアは同時に叫んだ。

カティア「なんてこと…！ 私達って…！ 私達って…！！！」

メルア「どんだけ人に頼ってきたの…！？」

ムサシが、大まじめな顔をした。

ムサシ「あんた達…、慌てたら負け。冷静に、話を繋ぐことだけを考えるのよ…。決して話が終わってしまうことを言わないように心掛けなさい！！ そうすれば何とか間はもつはずッ！」

メルア「は、はい…！」

.....

.....

.....

カティア（だから！！）

メルア（誰か！！）

ムサシ（話を振れやー！ー！！！！）

ニヤース（…。 ）

そんなこんなで、ムサシ達は歩き続け…。

三時間後…

そこには、半分やけくそ状態のカティアとメルアがいた。

カティア「嬉しくなると、つい、やっちゃうんだ　　せーの、らん・らん・るー!!！」

メルア「ちよつと دونالد!!　　あんたまたお店のお金を勝手に!!
!　何に使ってんのよオ!？」

カティア「…… Donaldは怒りを感じてもつい、殺っちゃうんだ
らんらんるうッ!!」ズバツ

メルア「ぐ、ぐはあっ!?!　ふ、不覚でしごかれた……。」

ムサシ「…意味がわからない……。」

自分のキャラを崩壊ながらも、なんとか話を繋ぐコツを掴み始めたカティア達だった。

ニヤース「…これ、繋がつてると言えるのかニヤー…?」

…言えないだろ。

・ようやく、イワヤマトンネル入口前・

ムサシ「なんとかここまでたどり着いたわ…。」

カティア「…沈黙死するかと思いましたわ。」

話を使い過ぎて、だいぶゲツソリしてしまったムサシ達。

メルアがハツとした。

メルア「…………あれ…？ 確か、この洞窟フラッシュが必要って聞いたような？」

ムサシ「ああ、それなら大丈夫よ。 私、懐中電灯持ってるし。」

……。

カティア「…もう、何でもありってカンジですわね…。この小説
……」

カティアは、もう諦めましたといった感じだ。

メルア「確か『いあいぎり』とかも覚えてないよね…？ カティア
ちゃん…。」

いあいぎりは、原作ではサントアンヌ号のゲロじじいから貰えるひでんマシンだが、カルヴィナが「こんなへボ技…」とせせら笑ったため、気を悪くした船長がとうとう最後までそれをくれずに別れたのだった。

まあ、別に邪魔な木があれば、テニアの火炎放射で燃やせるし、カティアのはっぱカッターで切り刻めるので、いあいぎりは必要ない。

カティア「私達、もう元はポケモンだったってこと、忘れられてるのかもしれないわね…。」シヨボン…

メルア「ええ〜?」

…確かに、カティア達は最近、ポケモンとはバトルをしていない。
フューリーと戦ったり、キモじじいを一方的に痛め付けることはあつたが。

ムサシ「大丈夫よ。洞窟には、こんな危険な事態でも周りの見えない脳天気なトレーナーが勝負を仕掛けてくるはずだから、バトルにでもらつわよ。」

確かに、よくそついう奴がいる。

カティア「なるほど、久しぶりにバトルできるんですね！」

メルア「まかせて下さい！」

カティア達の目が輝いた。 日頃の鬱憤晴らしには丁度いい。

ムサシ達は、ふもとのポケセンで回復し、イワヤマトンネルに入っ
ていった。

- イワヤマトンネル内 -

洞窟内は、じめじめし、完膚無きまでの暗さであった。

カティア「かなり暗いですね……。」

ムサシ「それじゃ、懐中電灯スイッチオン」

パッ

メルア「明るーい！」パチパチ

ニヤース（もう勝手にしてくれニヤ……。）

ムサシ「…さあ、先にすす…ぎよ!？」

ムサシが、突然驚き、飛びのいた!

カティア「どうしました、ムサシさん!？」

カティアが駆け寄る。

メルア「あれ、そこで誰かが寝てる…?？」

サトシ「げ、ばれた…!？」

ピカチュウ「ピカ… (汗)」

そこにいたのは、地べたに仰向けに寝転び、目に暗視スコープを付けた少年と、それを飽きれ顔で眺めるピカチュウだった。

ムサシ「こいつ、暗いのをいいことに、はいつくばって、私のスカートの中を覗いてたのよッ！！」

ムサシが青筋を立てて叫ぶ。

カティア「貴様アツ！！」

カティアが「つるのムチ」で、少年を縛り上げた！（しかも首を）

サトシ「うっ…、うっほほ入お！ きゃああギブギブギブ！！」

少年が悲痛な叫びをあげる。

メルア「カ、カティアちゃん、そろそろ離してあげたほうが……（汗）」

カティア「まだよ……！　こんな、脳天気なスケベ野郎がいるから、地球がフューリーに狙われるのよッ……！」

カティアの怒りはもつともだ。　何故、自分達がこれほど地球を救おうと苦悩しているときに、こんな輩は……！！

カティアは、尚も力任せに少年の首を締めた！

サトシ「あっ…………」ガクッ

少年は気を失ってしまった。

ピカチュウ「……！　ピカピッ……！」

ピカチュウが慌てて少年に駆け寄る。

ムサシ「気絶しただけみたいね。じきに気がつくでしょ。こいつほつといて、先に進む？」

そのとき、カティアはニヤリとした。
何かを閃いたらしい。

カティア「いいえ……。この人、利用できるかもしれない……！」

メルア「え？ どういうふうな？」

カティア「え」と、まずパシリ役につかって、ストレス発散用のサンドバッグ、あとは危険な時に彼を盾代わりにしましょう。」

メルア「ひ、ひえええ……（汗）」

ムサシ「カティア……。 あんた、ずいぶん黒くなったわね……。」

カルヴィナの影響が大きいかもしれない。

可哀相な少年だ。

ムサシのスカートを覗いたばかりに。

そのときピカチュウが、ムサシ達を睨んだ。

ピカチュウ「ピカピカ……!!」

そして、おもむろに構えをとった。

ムサシ「こいつ、少年のポケモン……!!? 来るわッ……!!」

ムサシが危険を察知し、叫んだ。

ニヤース「ニヤ!？」

ピカチュウ「ピガチュウウツ!!!!」

次の瞬間、ピカチュウから強力な十万ボルトがくりだされた!

カティア「く!? やられる!!」

メルア「この程度の電撃なら……!! オルゴンクラウド展開! 攻撃を中和します!! 皆、私の後ろに隠れて!」 攻

メルアが叫んだ！

ムサシ「メルア…！？ 頼んだわ！」

ゴウウウウ……！

すんでのところでメルアのオルゴンクラウドが発動し、ピカチュウの十万ボルトを打ち消した。

ムサシ「ふう……。何とか助かったわね。」

ムサシが胸を撫で下ろしながら言った。

カティア「メルア、ありがとう……って、スケベ小僧が見当たりませんよ!？」

ムサシ「なんですって!？」

ムサシが慌てて振り返ると、サトシは洞窟の入口に向かって、ピカチュウと一緒に逃げているところだった。

ムサシ「しまった…! ピカチュウの十万ボルトは、ただの陽動だったのね!?!」

カティア「逃がすかあ!! 性犯罪者として、警察に突き出してやるッ!!」ダッ!

ピカチュウ「ピカピカ……」（自業自得だ）。」

ピカチュウはこんなサトシに、呆れ気味だ。

…が、サトシにはそれがわからないようで。

サトシ「捕まってたまるか！ 出てこい、ケーシィ！！」バツ！

そう叫び、サトシがモンスターボールを放ると、中からケーシィが飛び出してきた。

サトシ「ケーシィ、もう何処でもいい！！テレポートを使うんだ！

「！」

ケーシィは頷き、テレポートの構えをとった。

ケーシィ「ケエエエツ！！！」

シュイン！！

カティア「な……？ 消えたあ！？」

ムサシ「くそ、テレポートか！！」

ムサシが悔しがる。

そりゃ、自分のパンティを覗かれた挙げ句、危うく十万ボルトをくらうらそうになったのだ。腹を立てない者はいないだろう。

ニヤース「しかし、ニヤんて引き際がいい奴ニヤ……。」

ニヤースは不覚にも、少しだけあの少年に感心してしまった。

メルア「…なんか後味が悪いですが、早いところ洞窟を抜けましょ
うよ……。」

メルアが促す。

ムサシ「あゝ、胸糞悪い。でも仕方ないわね。…行きましょ。

「

カティア「畜生めが！！ あんな奴あ、そのうちに罰が当たって、
殺されちまえばいいんだよッ！！！」

ニヤース「……シオントウンにつくまでに、その性格は戻しとけニ
ヤ……（汗）」

……

……

……

……

……

そのころ、サトシは……

???

サトシ「うう……ここは何処だよ……。」

ピカチュウ「ピカ……」

ケイシーの咄嗟に使用したテレポートが祟ったのか、見覚えのない場所に飛ばされてしまったようだ。

サトシ「うーん……。周りにも、なにも無いし……。ん？」

何かが、近づいてくる……。

サトシ「え……、あなた達は……！？ う、うわああああ……！」

ピカチュウ「ピカ〜ッ……！」

……。

「……ククク……。さて皆、用は済んだ。引き上げるぞ……。」

そいつらは、サトシとピカチュウを気絶させ、何処かへと運んでいった……。

ムサシ「いや、洞窟の中にいた理科系の男共をなぎたおして、い
いストレス解消ができたわね。」

ムサシが満足そうに、ぶん取った金を財布に入れている。 勝因と
しては、カティアが鬼のように強かったというのもあったが、ムサ
シの指示もほとんどぬかりなかった。

カティア「もう、はしたないですよ、ムサシさん…。」

カティアも、久々のバトルで鬱憤をすべて晴らせたらしい。

メルア（よかった…）。 カティアちゃんの性格が戻って！）

メルアはホッとしていた。

ニヤース「やれやれ……ん？ あれ、出口じゃないかニヤ？」

前方から、光がさしていた。

ムサシ「本当ね！ さあさあ皆、覚悟を決めて、シオンタウンに乗り込むわよ！」ダッ！

メルア「あ、ちょー！！ 走らないでくださいよ、ムサシさあ〜ん！！」

……

……

……

……

テニア「な、なんだよ!? このサブタイトル!?!?」

カルヴィナ「こっちが聞きたいくらいよ……。」

コジロウ(俺、こいつらを上手くまとめられるか不安だな……)。

カルヴィナ「それはそうと。ムサシルトを呼んだ読者さんは、
こっちは見たらダメよ。」

テニア「何その縛り!?!」

「カルヴィナ」当たり前でしょ。少なくとも、スパロボの世界では。」

テニア「う、うん…。それもそうだね。」

「コジロウ」ずいぶん厳しいんだな。スパロボの世界とやらは。」

テニア「まあね。」

カルヴィナ「あ、さっきの話は無論、冗談だから。ムサシルートと併用して御覧ください。」m()m

テニア&コジロウ

「えええええッ!?!?!?!?」

カルヴィナルート11話「テニア、カルヴィナみたいな爆乳が欲しいの巻」

ムサシ達が地下通路に入っていったあと、カルヴィナは早速タمامシを指さすと言っ。

カルヴィナ「さあ、行きましょ。 ……で、タمامシへはどっやって行くんだっかしら？」

カルヴィナの問いに、コジロウがハツとした。

コジロウ「お、おい……確か、ヤマブキを通らないと行けないはずだぞ？」

カルヴィナ・テニア「へ……？」

固まるカルヴィナとテニア。

カルヴィナ「な！？ 敵陣を横切れと！？」

テニア「無理無理無理！！！」

コジロウ「それが駄目なら、タマムシ行きの地下通路もあるけど……」

カルヴィナ「それはいい！ で、それはどこにあるのよ？」

コジロウ「え」と……シオンタウンの西だよ……」

テニア「…」

カルヴィナ「…」

カルテニ「何イーーーーッ!!!?」

カルヴィナとテニアがまったく同時に叫んだ。

カルヴィナ「それじゃ、あいつらと別れた意味がなくなるじゃない!!!」

それはそうである。

テニア「シオン…嫌だ…！ 嫌だ嫌だ嫌だ嫌だー！！！」

テニアはまたもやパニック状態に陥っているようだ。

コジロウ「やれやれ…じゃ、どうする？ わざわざセキチクを経由するほどの時間はねえぞ？」

コジロウが呆れていると、

カルヴィナ「そうね……テニア、あんたヒトカゲよね？」

どうやら、カルヴィナは何かを閃いたようだ。

テニア「なんで今更…？ この尻尾が見えないの？」

テニアが尻尾の炎をちらつかせた。

カルヴィナ「『あなをほる』で、タムムシまで地面にトンネルを掘れない？」

テニア「へ…？」

テニアはキョトンとした。　だって、あなをほるなんて覚えてないもの。

カルヴィナ「別にいいのよ。　出来ないなら、シオンタウンを経由するまでよ。」

テニア「や、やります…！　意地でも…！」

シオンの名前がでたとたん、パツと態度が変わるテニア。

コジロウ（これは、弱点発見だな…！）

ほくそ笑むコジロウ。

ヤマブキシテイ 関所前

警備員「あゝ…喉が渴いた…」

ポケモンでは既にお決まりだが、警備員が喉をかわかして嘆いていた。

だが、物陰に隠れて見ていたコジロウは、その正体を見抜いていた。

コジロウ（あれは……地球人じゃないな……。肌の色でわかる……。）

地球人とフューリーは、形こそ変わらない人間だが、微妙に体の色などが異なる。

だが、それは本当に微々たる違いなので、フューリーをあまり見たことがなければ、判断するのは少し難しい。

テナア（フューリーが警備員に化けているってことは、ヤマブキはもう……。）

テナアも、状況を察した。

カルヴィナ（あの警備員、こっちには気付いてないようね……テナア！！ 今よ！ あなをほる！！）

カルヴィナが合図した。

テニア（OK！！ そりゃあああ！！）ガシツガシツ！！

もうスピードで地面が削られる。

…てゆーか、テニアはあなをほる覚えてないんだってば……。

警備員「…なんか音したか…？　きのせいかな。」

穴の中

地中深くに潜ったカルヴィナ達。

カルヴィナ「よし。あとはタマムシ目指して頑張りなさい！ テニアー！」

ガシッガシッ

テニア「ううう、き、きついよ……。クーランジュの鬼畜ー！！」
ガシッガシッ

テニアは涙目だ（笑）

コジロウ（ほんとコイツら、やる事がとんでもないよな）

ガシッガシッ

カルヴィナ「……………」

テニア「あ…！」

テニアは、土を掘ったときの振動でカルヴィナの胸が揺れるのを見た。

そして羨ましく思った。

テニア「ふう〜。アタシ、こんなこととして余計なエネルギー使ってるから胸が大きくななんないのかなあ？」

胸が他の二匹と比べて小さいテニアにとって、切実な悩みであった。

が、カルヴィナは容赦無しで言った。

カルヴィナ「何言ってるのよ？ 別に半分ポケモンのあんたに、胸のサイズが大きい必要ないじゃない。」

グサツ！！

テナア「！？ ク、クーランジュ！！ あんたの今の言葉、激しくアタシの心に突き刺さったよツ！！」

カルヴィナ「いいじゃない別に。」

カルヴィナは鼻をならして言った。

テナア「な、なんだと〜！！？ クーランジュ、お前の胸よこせ〜
〜！！？」

テナアはカルヴィナの胸をつかんだ！！

カルヴィナ「キャ…ノノノ
…って、何すんのよブツ殺すわよッ…！」

バキヤ…！！

テナア「グボオ…！！？」

カルヴィナがもの凄いいけんまくでテナアを蹴飛ばした！！

おそらく、いりよくは255を超えただろう。

テナア「クウウウラアンジュウウウツ…！！」ズルズル…！！

テナアは、はいつくばりゾンビの「とくはいつくばり、尚もカルヴィナの胸を狙う。

カルヴィナ「う……（汗） ……もう、さっきの無礼は許してあげるから、さっさと穴掘りなさい穴を！！」

さすがにキモいと思ったカルヴィナは、テニアを慰めにはいった。
（慰め…？） なお、勘違いを招かないために述べておくが、カルヴィナに「そっちの気」はないらしい。

コジロウ（今、ツッコミ役（銭亀、蕾女）はいないんだよね…。
どうツッコめばいいんだ…？ ……？ ハア…絶望的だ…！）

コジロウは頭を抱えた。

おそらく、この分岐ルートキャラ振り分けは失敗といえよう。
（だって、ムサシ達はムサシ達で悩んでいたのだから…。）

テニアは噉り泣きながら、あなをほる。

ガシツガシツガ……………

テニア「ん？　今、手応えあったよ！　地上に出るよ……！」

テニアが歓喜の声をあげる。　しかし。

カルヴィナ「でかした貧乳……！」

テニア「……………」

カルヴィナの鋭利な言葉により、再び涙目のテニア。

コジロウ「おいおい…止めてやれよ、クーランジュ…。」

コジロウが仲裁に入ろうとするが……

カルヴィナ「私の前に出てくるな！」

彼女お決まりのセリフで流された。

コジロウ「……………（、・、）」「（、）」

タمامシシティ

カルヴィナ「なるほど、ここがタمامシシティか。 どうやら、今回
回は間に合ったみたいね。」

カルヴィナが周りを見渡した。

かなり都会を思わせる街だ。

人も普通に歩いているし、まだフューリーに表立って占領されたか
んじはない。

コジロウ「…。」

テナア「？ どしたのコジロウ。 考え込んだりして。」

コジロウ「…この街、ロケット団のアジトがあるんだよ…。」

カルヴィナ「え？ 前にアジトはヤマブキだって言ってたじゃない。

」

カルヴィナが聞き返す。

コジロウ「シルフを制圧してからは、ヤマブキが本拠地で、こつちは前のアジトなんだ。まだフューリーに襲撃されていない、生き残りの仲間もいるかもしれない。気になるんだよ。」

コジロウ（それに、『アレ』をフューリーに渡すわけにはいかないからな……。）

テニア「そっか……なら、行ってみようよ！ そのアジトに。」

コジロウ「……カルヴィナは、良いのか？」

カルヴィナ「ええ。別にかまわない。生き残りがいれば、シルフのフューリー基地に潜入するとき、協力してくれるかもしれないしね。」

カルヴィナは、とにかく戦力が欲しかったから、別にコジロウの提案に異論は無かった。全ては、フューリーを皆殺しにする為に……。

コジロウ「ありがとう。では、アジトまで案内する。」

……

……

……

スロット・コーナー前

コジロウ「着いた。　ここが、俺達のアジトだ。」

テニア「…へ？　このスロットコーナーが、ロケット団のアジトなの！？」

テニアが目を丸くした。

コジロウ「ああ。　中に、隠し通路があるんだ。　外からは荒らされた子はないが…。　中はどうなっているかわからんな。」

コジロウが真剣に悩んでいる中……

カルヴィナ「へえ、スロットコーナーがアジトだなんて、洒落てるじゃない。　…ちょっとスロットで遊んで行こうかしら？」

カルヴィナはただ単に、景品の見本としてショーウィンドーに飾られている、『ほのぼの』の縫いぐるみが欲しいだけだった。

コジロウ「少しは緊張感をもてよな！！ まったくもつっ！」

コジロウは、カルヴィナという女にほとほと呆れ果てた。

テナ「まあまあ。入口でしのごの言っても仕方ないし、とりあえず中に入ってみたいようじゃん？」

テナがそんな二人を促す。

三人は、中へ入ってみたが、店内は客もおらず、ひどく閑散としていた。

カルヴィナ「さすがに営業はやってないみたいね。 …まあ、ロケ
ット団が壊滅したんだから当たり前なんだけど。」

テニア「確かにね。 壊滅後も何故か、営業し続けるゲーム版はお
かしいよね。」

また、メタ発言をするテニア。

コジロウ「…お前ら、ちょっとは静かに出来ないのか…？ どこか
にフューリーが隠れてたら、大変だろ！」

コジロウはフューリーに警戒していて、気が気でない。

テニア「ソーリー。」

コジロウとは逆に、のほほんと謝るテニア。

カルヴィナ「ていうかテニア、あんたサイトロンで未来予知が出来るんでしょ？ フューリーがこのアジトにいるのかどうか、確かめなさいよ。」

テニア「ごめん……。未来予知って言っても、そんなに万能じゃないんだよ。見たいときに、いつでも好きに未来が見られるわけじゃないんだ……。 (汗) 何となく、そうなんじゃないかな、って感じでわかるだけなの。」

カルヴィナ「チ…、肝心なときに役に立たないんだから……。」

カルヴィナが舌を打った。

テニア「ごめんね。せめてアタシがエスパータイプのパokemonなら、もう少し上手く能力を使えたかもしれないんだけど……。」

テニアは、すこし自虐的な性格があるようだ。

コジロウ「おーい、早く来いよー。」

先を歩いていたコジロウが、なるべく小声でカルヴィナ達を呼んだ。

テニア「はあ〜い！ 今行くよー!~!」

テニアが、馬鹿でかい声で返事をした。

コジロウ「声がでかいつーの!! いい加減にしろよ!~!」

コジロウが怒鳴る。

カルヴィナ「……あんたこそ、静かにするのね。」「コジロウ。」

コジロウ「う……（汗）」

- ポスター前 -

壁に、ポスターが貼ってある。

テナア「何、この御下劣なポスター。」

コジロウ「このポスターの裏に、アジトへの隠し通路を開くスイッチがあるんだよ。」

コジロウが得意げに答える。

だが……

カルヴィナ「なんだってこんな、わかりやすいところに……。」

テナ「意味がわからない……。」

スパロボという、シリアスなゲームの出身であるカルヴィナとテナは、この理不尽なポケモンワールドが理解できないときがある。

コジロウ「い、いいだろう別に！ これでも今まで見つかったことないんだぞ……！」

カルヴィナは呆れて、ため息をついた。

カルヴィナ「ハア……、駄目ね。こんな目くらし、フューリーには皆無よ。」

テナ「ホントこの世界、馬鹿ばっか。」

コジロウ「チクシヨ……。」

言い返す言葉のない、コジロウだったとき。

つづく……

11・5話「激戦へのクロックパルス」(前書き)

テニア「…11・5話？」

コジロウ「なんじゃこりゃ？」

カルヴィナ「どうやら、そろそろ開幕するみたいね…。 本当の戦いが…！」

テニア「へえ。 じゃあ今回は、その予告みたいなものかな？」

最近、全然更新してませんでした（汗）

学校の成績がちょっと思わしくなくて…。

テニア「おいおい」、小説なんて書いてる場合!？」

というわけで、夏休みに入るまではこんな調子だと思えます…。

夏休みになったら、バンバン更新できるんですがねえ（涙）

11・5話「激戦へのクロックパルス」

ムサシ達がシオンタウンへ着いた時と、ちょうど同じ頃……

ここは、マサラタウンより遙か南方に位置する小さな島、グレンタウン。

とある研究所

研究所の地下へとつづく通路を、研究員達を押しつけながら、二人の男女が駆けていく。

？「どいたどいた！！ 敵襲だ！ お前達研究員は、はやくシエル
ターにでも退避しとけッ！！」

赤い髪の男が、怒鳴りながら走っていく。

？？「待ってください、隊長！」

彼を後ろから追いかける女が叫ぶ。

？「フィオナか……？ お前も、ミスホとラージってやつらと一緒
に避難したらどうなんだ！」

女の名前は、フィオナというらしい。

フィオナ「いいえ！ 私だって、戦えます！！ 『エクサランス』」

も無事に完成したんです。　隊長だって、この前見たでしょう?」

?「あのフレーム換装型の機動兵器か。　確かに、この前の戦いで
は、エクサランスに助けられたがなあ……。　大丈夫なのか?」

フィオナ「……?　何がですか?」

?「ほら……。　奴らは、なんだかエクサランスに興味があるようだったって、この前君が言ってたじゃないか。　今度は、機体ごと狙われることになるかもしれないんだぞ。」

それを聞き、フィオナは急に押し黙る。

フィオナ「でも……。」

男は優しい顔をして、フィオナに言う。

？「俺にまかせときなつて！ 絶対に何とかしてみせるんだな、これが。」ニカッ！

言い終わると、男は再び、研究所の地下へ向かって駆け出した。

フィオナ「隊長……。」

…そのときフィオナは、覚悟を決めた。

フィオナ（ラージは、これ以上、歴史に干渉しないほうがいいと言っていたけれど……。……。でも、それでも、私は……。！）

研究所の地下は、大きな格納庫となっていた。さまざまな大型ロボットが並んでいる。

そこへ、さっきの男がたどり着き、側にいた研究員に声をかけた。

？「ソウルゲインは使えるのかい？」

研究員「隊長！ すみません、まだこの前の戦闘で負った損傷を、整備しきれていなくて……。」

？「……。ち、あのジジイめ、何を遊んでんだよ！」

男が舌打ちをする。

研究員「ごめんなさい、博士も『クロガネ』建造作業に追われて
いるようでして……。」

研究員が申し訳なさそうな顔で言った。

？「クソ、ここがフューリーや、あいつらにやられちゃったら、何
もかもおしまいってことが何でわかんねえかな……？」

男は呆れたというポーズをする。

研究員「あの…、他の整備士で、応急措置くらいならば出来ますが
……。」

？「いや……。そんな時間はねえ。他に出来る機体は無いのか？」

研究員「そうですね……。レーザーアングリフならば、直ぐにでも出られますよ！」

研究員が、格納庫の隅に置かれた一体のロボットを見る。

それは、体中に強力な実弾武器が仕込まれている機体であった。

『歩く戦車』とでも言えそうだ。

？「レーザーアングリフって、ラドム博士がテスラ研から、ソウルゲインと一緒に持って来たリアルロボットか。

…よし、一か八か、こいつで行ってみる…！」

男がレーザーアングリフに向かって駆け出した。

ラーズアングリフ/コクピット

研究員「…操縦は、ソウルゲインとほぼ同じです。さすがに、馬力は劣りますが……」

リアルロボットに属する機体、『ラーズアングリフ』は、スーパーロボットである『ソウルゲイン』とは異なり、運動性は申し分ないが、パワーはない。そのくらいのは、この男も熟知している。

？「わかってる。ハッチ、閉じるぜ。」

男は手慣れた手つきで、コクピットのハッチを閉じ、メインモニターに灯を入れた。

？「さて……。」

アクセル「アクセル・アルマー、ラーズアングリフで出るんだな、これが！」

ゴォォ！！

ラーズアングリフはバーニアを吹かし、地上へと飛び出していった

……

ムサシルート12話「予感」(前書き)

カティア「…あれ？ 予告編、こないいところで終わりですか？」

ムサシ「アクセルが登場するのは、まだ15話くらい後の予定よ。
今はまだポケモンテイストで行きたいの。」

メルア「でもなんかイマイチ中途半端なポケモンテイストですよね。」

ムサシ「マンネリ化してるのかしらね。」

ニヤース「作者の器量が無いだけにや。」

全員「たwwしwwかwwにwwww!!」

始まり。

.....。

ムサシルート12話「予感」

というわけで、ヤケに厨ニクサイ予告編もほどほどに、ムサシ達の旅が再開したのだった……。

イワヤマトンネル出口

ニヤース「ようやく、洞窟の外に出られたニヤー！」

ムサシ「ふう……。シオンタウンまで、まだまだ時間かかるわね。」

ムサシが溜め息をつく。

カティア「洞窟の中は、変態（怪獣マニア、理科系の男e t c…）であふれかえって、むさ苦しかったですわ。ま、皆ポケモンバトルで全員ギタギタにしてやりましたかね。」

… だんだん、男性に対する認識が悪くなっていくカティア。

… つうかもう、カティアの面影どこにもないじゃん！ 誰なんだこれは！？ なんなんだこの小説は！！？

メルア「確かにむさ苦しかったです。外のキレイな空気が吸えて、ホッとしましたよ。」

… よかった。メルアはまだ性格は原作に近くて。

… カティアとメルアは心から安堵しているようであった。

が、しかし…。

ニヤース「うん…、なんか嫌な予感がするニヤ…。」

何かの悪寒を感じたニヤースが、険しい顔をして身震いした、

そのときだった…！！

バツツ!!!

山男「あはははは！ ふははははっ!!」

叢中から山男が踊り出た!!

ムサシ・カティア・メルア・ニャース
(げっ……………!)

ムサシ達は背筋が凍りついた。

だって、不意に現れたこの山男。 何故か、キモいくらいに笑っているのである。 why…?

ムサシ「……………」

ムサシ「…………よし、無視して行きましょ。」

カティア「イエス、ミストレス。」

メルア「え、えええ〜!!!？」

二人の薄情さに驚きを隠せないメルア。(笑)

…ま、ある意味、二人の判断は正確だ……。この山男、はたから見れば、精神異常者にしか見えない。関わらない方が懸命であろう。

…というわけで、ムサシ達は山男には気づかぬように通り過ぎようとしたのだが……。

山男「そ、その方あはは!! たすけ^^^^てエ^^^^、
くふふふふだははははははさいひひひひよほほほほ!!」

駄目だった。

山男にあっさり気づかれてしまった。

ムサシ（う、ガチでキモいわ……（汗））

カティア（ム、ムサシさん、逃げましょう……。　いくら困っている人でも、この人は助けたくないですわ……）

ニヤース（賛成だニヤ。　この男は、ヤバイ。　ニヤーのカンがそう言ってるのニヤ。　）

メルア（そうですね……仕方ないですよ、こればかりは……）

全員の場合は一致した。

追ってきましたよ、ムサシさん!？」

ダダダダッ!

メルア「いやああッ!?!?」

ダダダダッ!!

ムサシ「皆、必死で逃げなさい!!
このあとの人生、一生歩けなくなってもいいから!!
で逃げるのよオ!?!?!」
今は死ぬ気

ダダダダッ!?!!

ニヤース「こ、殺されるニヤー!!!(泣)」

その夜、とある森の中

ムサシ「ゼエツ　ゼエツ　…、
なんとか逃げ切れたわね……。」

カティア「結局なんだったんですかね…、彼は……。」「ヤレヤレ…

メルア「それより、もう時間が遅いですね。今日中にシオンタウンには到着できなさそうですねえ……。(、・、・、)」「

ムサシ「…暗いのに、下手に動くのも危ないから、今日はもう野宿
しかないわね…。」

ムサシは溜め息をつきながら言った。

カティア「そんな…。」

ニヤース「それじゃあ、ご飯はどうするのじゃ？」

ムサシ「適当に、山菜とか探しましょう。」

カティア（私、自分と同じ植物を共食いしなくちゃいけないのね…
…。）

小1時間後…

他のみんなより、一足早く食べ物を見つけたムサシは、もとの場所で焚火をしていた。

パチパチ……

ムサシ「ふーっ、ふーっ……」

…あゝ、酸欠起こしそうだわゝ…。」

そこへ、二番目にカティアが戻ってきた。

カティア「あ、ムサシさん。早かったんですね。」

ムサシ「まーね。ていうか、アンタも焚火を起こすの手伝いなさ

いよゝ？」

カティア「うつ……（汗）

そ、それは嫌ですよ……。」「オドオド…

ムサシ「そうよね。

言ってみただけだから、気にしないで。」「

ムサシはクスクス笑いながらも、徐々に焚火を大きくしていった。

しばらくして……

メルア「ムサシさん、カティアちゃん、ただいまですー！！」

ムサシ「おかえりメルア。何か食べ物あった？」

メルア「暗くてわかりにくかったですけど、匂いを嗅いでたら、野

イチゴが見つかりましたよ！」

カティア「ガーディみたいね（笑）
私は、あまいミツを見つけたわ。」

メルア「わ〜い！」

ムサシ「私はマトマの実を採ったわよ。」

メルア「え…!!！」

ムサシ「何か不満…？」

カティア（あ、メルアは辛いのがダメだったわね…。）

マトマの実は辛い。メルアはあまり好んではないのだ。ちな
みに、テニアは逆に辛い物が好物らしい。

ムサシ「困ったわね。マトマの実をベースに、スープでも作るつもりだったんだけど……。」

カティア「ニヤースさんに期待するしかないですね。」

ムサシ「そういえば、ニヤース遅いわね。見てくるから、メルア、焚火お願い。」

メルア「は、はい!! ……ふーっ、ふーっ、ふ……ああ!!」

ジャバババ……

メルアは思わず、みずでっぼうを出してしまった!

カティア「焚火、消えましたわ…。」

ムサシ「ちょ、おまwwwwww」

……はてさて、ニヤースはどこに行ったのか。何か嫌な予感が拭えない……。

つづく…！

カルヴィナルート12話「再会」(前書き)

テニア「この小説、まだ続けてたの？」

カルヴィナ「放置にも程があるわね。」

コジロウ「まあ、話を再会しようじゃん？」

カルヴィナルート12話「再会」

・アジト内部・

元ロケット団アジトの内部は、ところどころに破壊された跡が残っていた。

しかし、内装は広く、豪華な印象だ。

カルヴィナ「なかなか広いアジトじゃない？」

カルヴィナが感嘆の声をあげた。

このアジトは、巨大な上、あちこちにトラップも仕掛けられている様子。

テニア「わわ！ 何コレ！？ クーランジュ、この床、乗ると勝手に進むよ！ 面白い〜 = < > * (「うい〜んうい〜ん！

テナアが何度も動く床に乗って、面白がっている。

コジロウ「俺の専用カードキーは、壊れていて使えないようだ。奥に進むには、仕掛けをクリアーして行くしかないな。」

カルヴィナ「…なるほどね。また、面倒臭そうな仕掛けだこと…」

ストーリーをスパスパ進めたいカルヴィナとしては、面倒臭いことこの上ない。

コジロウ「仕方ねえだろ…。ボスの趣味だったんだよ、仕掛け作りはさ。」しみじみ…

テナア「マジかよ…」

カルヴィナ（ロケット団創始者の一人息子、サカキか……。噂には聞いてたけど、かなりの変わり者だったようね。）

その頃、アジトの奥では…

ジュアーム「オラオラア！！死にやがれゴミ共が！！」

ロケット団残党「うわああ！！」

アジトの最深部付近にて、ロケット団員最後の生き残りが、フューリーに襲撃を受けていた。

ロケット団残党2「く、くそ…こいつら、ボスを殺したただけでは飽き足らず…！！」

ジュアーム「従士、ラーズエイレム使え。」

従士「了解…」

ピカアア！！

ロケット団残党一同「……………」

例にもよって、ラースイレムの発動下では、サイトロン適性のあ
る者以外、時間が止まってしまう。

ロケット団残党達の負けは、すでに確定した。

ジュアーム「ハハツ！ ザマあねえな！！ おい、従士ども！ あ
とはこいつらを一人残らず八つ裂きにでもしとけ。」

従士「了解。」

ジュアーム（…アルヴァン様は最近、消極的になってしまわれた
…。すべては、クチバでカルヴィナと会ってからだ…！）

ジュアーム（とにかく、部下である俺が少しでも戦果を出さなけれ
ば、アルヴァン様はランドン様の信用を失ってしまう…。）

テニア「…!?!」

そのころ、テニアはこのアジトの異変を感じとった。

テニア「大変だよクーランジュ!! あいつらがいるんだ! このアジトに!!」

カルヴィナ「何ですって!?! あんた、確かにサイトロンでそれを見たのね!?!」

テニア「う、うん…。」

カルヴィナの剣幕に、テニアは少したじろいだ。

カルヴィナは口元を歪ゆがませ、冷たい表情をあらわにした。

カルヴィナ「クク…、ハハハハ…ッ！」

テニア「ッ!？」

コジロウ「お、おい。 大丈夫か!？」

カルヴィナ「ようやくだ…、ようやくこのときが!

待っていないさい、アル!!ヴァン…!!

私がお前の喉元を撃ち抜いてやる…!!」

カルヴィナは、また以前の復讐者としての感情に支配されている。

このままでは、冷静さを失った彼女は、アル!!ヴァンに殺されてしまいかもしれない。 そうテニアは悟った。

テニア「クーランジュ、あまり無茶はしないでよ…。 無茶しそうになったら、私が止めるから…。」

カルヴィナ「なんですって……?」ギロツ

テニア「……」

カルヴィナ「ふざけるなッ!!」

そのせいであいつを仕留め損なったら、あんた、ただじゃおかないわよ!」

テニア「いいよアタシは!! クーランジュが無事でいてくれるなら、恨まれたってかまわないよ!!」

カルヴィナ「あんた……」

その頃、ジュアム達はちょうどロケット団員達を一人残らず皆殺しにし終えていた。

ジュアム「……さてと、あらかた片付いたな?」

床には、団員達の血が滲み出していた。

内臓をほじくり返され、グチャグチャになった遺体。

ちぎられた手足。

踏み付けられた首。

どうやらフューリーは、地球人に何の価値も見出だしてはいないようだ。

その時、一人の従士が異変に気づいた。

従士「…？ ジュアーム様、ラースエイレムのムーヴが低下…、
ラースエイレム、停止しました…。」

ジュアーム「なに…？ そんなことができる奴らは…。」

ジュアームの振り向いた先に、カルヴィナ達が立っていた。

テニア「あ！ クーランジュ、あいつらだよ！」

コジロウ「く、死体だらけだ……！！ 確か、ジュアムってやつだよな？ アルヴァンってやつ姿がみえないぞ？」

カルヴィナ「ジュアム、貴様か！ アルヴァンはどこだ！？ 言え……！」

ジュアム「ああ？ やっぱ、あんたらかよ。カルヴィナさんよ？」

カルヴィナ「質問に答えろ！ アルヴァンは！？」

それを聞き、ジュアムは急に深刻な顔で言った。

ジュアム「あんたのせいなんだよ……」。

アルヴァン様は、あんたとクチバで会って以来、何か思い詰めるようになっちゃった……。

だからあんたはここで俺が八つ裂きにして殺してやるよ！！ そうすれば、アルヴァン様も元に戻られるに違いねえんだ！！」

カルヴィナ「ふん！ お前なんか、私が殺れるものか！」

ジュアーム「へ！ 俺あ知ってたんだぜ？ あんた、あの事故以来、後遺症でポケモンバトルも出来なくなっちゃったんだってなあ！？
へへへ、お笑いだぜ！ その特殊なサイトロンの小娘ヒトカゲがいてくれなきゃ、ろくに指示すら出せねえんだろうがああ！！ ああッ！？」

カルヴィナ「ジュアームウウツ！！」

カルヴィナは本気で怒った。

テナ「クーランジュ、落ち着いて！！ あんたが焦ると、いくらサイトロンのアタシでもフォローしきれない！！」

ジュアーム「先手必勝だ！ てめえら、まとめてすぐにあの世へ送ってやるよ！！」

カルヴィナ「来てみる、ジュアーム！ いくら手持ちの武器の性能が良くても、動きの癖までは隠せないぞ！！」

「いや否や、ジュアームの手下の従士達が一斉に襲い掛かってきた
！！」

コジロウ「行け、ドガース！！」

コジロウがボールを投げると、中からドガースが飛びだした！

ドガース「ドガー！」

コジロウ「クーランジュ、周りの従士達は俺とドガースでやる！！

お前達はジュアームを頼む！！」

カルヴィナ「了解……。ジュアームを倒して、アルヴァンを引きずり出してやる！ 行きなさい！ テニア！ メタルクロー！！」

テニア「わかった！！」バツ！

テニアが猛スピードで飛びだした！

ジュアム「ハン！ 見え見えなんだよ！！」ヴォン！

テニア「消えた…？」

カルヴィナ「オルゴンクラウドか！ テニア、後ろ！」

テニア「そこかあッ！」

ジュアム「何…！？」

ザシュ！

テニアの爪は、ジュアムの左腕を貫いた。

ジュアム「グア！！ ち、直撃だと…！？ この、生意気なんだよ…！！」

バキ！！

ジュアームの蹴りがテニアの腹を打った。

テニア「ぐっ!? やるな、お前!! でももうお前、かなりキツそうに見えるよ?」

テニアがニヤリと笑った。

ジュアーム「くそ! まさかこんな化け物ゴミトカゲなんかには苦戦するとはよお!」

テニア「ほざいとけ! お前なんかには負けるかよ!」

ジュアーム「この……………な!」

カルヴィナ「ジュアーム、覚悟なさい…。」

気を抜いたジュアームは、背後から銃を持って近づいてくるカルヴィナに気づけなかったのだ。

冷たい銃口が、倒れこんでいたジユアムの後頭部に突き付けられた。

ジユアム「クソ!!! 嫌だ!!! なんで俺がこんなところで、こんなゴミ共なんかにいッ!!!」

カルヴィナ「無駄よ、ジユアム!!!。お前は散々、人の命を弄んだ!!!。その運命から、逃れられやしないわ。さよならよ。」

カルヴィナは冷たく言い放った。

ジユアム「ぐ!!!クソオオ!!!」

テナ「!!!? 待って、クーランジュ!!!。来るよ!!!」

ヴォン!

アル＝ヴァン「そこまでにしてもらおう。」

ジュア＝ム「アル＝ヴァン様!？」

アル＝ヴァンは、自分の銃でカルヴィナの持つ銃を弾き飛ばした。

カルヴィナ「ちっ…!」

アル＝ヴァン「ジュア＝ム。命令を無視してこのような場所で何をしている…? 下がれ。」

ジュア＝ム「し、しかし! このアジトの奥には、我々の研究対象があるのですよ。こままでは、こいつらに…!」

アル＝ヴァン「下がれ!」

アル＝ヴァンは妥協を許さないと言った顔をして、怒鳴った。

ジュアム「は、ハッ!!」

ヴォン!

カルヴィナ「…アルヴァン! 待っていたわよ…!! 貴様を殺したくて殺したくて、待ち遠しかったわ…!!」

アルヴァン「カルヴィナ…」

カルヴィナ「私をその名で呼ぶなど言ったッ!! 早く勝負しろッ!! 私を殺しに来い!!」

アルヴァン「…それは出来ない」

カルヴィナ「ふざけるなアッ!!」

アルヴァン「私達は、こことは違う場所で戦う…。 私には、それが見えた…。」

カルヴィナ「…何？」

テナア「サイトロンだ」

アル＝ヴァン「そうだ…。私達はサイトロンの導く道に従うまで。
その時まで、君には絶対に生き残ってほしい。しばしさらばだ
……」

ヴォン！

カルヴィナ「なっ！？ 待て！！ 戻れ、アル＝ヴァン！！ 逃げるつもりか！？」

テナア「ダメだ…。 奴らの気配が消えた…。 もう追っかけられないよ…！」

カルヴィナ「な…！？ く、くそおおおッ…！！」

カルヴィナは悔しげに地面を打った。

テニア「クーランジュ……。」

アル＝ヴァンが撤退して、しばらくたち、なんとかカルヴィナも落ち着いてきた。

テニア「……そういえば、コジロウは？　確か従士達を相手してたはずだけど……。」

カルヴィナ「……死んではいないんじゃない？」

テニア「探してみようよ。このアジト、結構広いみたいだから、戦ってるうちに奥に行ったのかも。助けに行かないと！」

カルヴィナ「……チツ！　どいつもこいつも余計な手間を……！」

テニア「……………」

・その頃、アジト最深部……

コジロウ「ふう……。何とか、あいつらを追っ払えたようだな……。」

コジロウのドガースの圧倒的強さに、従士達は逃げだしたのだ。

コジロウ「フ……。所詮は時間兵器に頼らなければ、勝てんようだな。あいつらは。」

コジロウは鼻で笑うと、奴らに殺されたかつての同胞を思った。

コジロウ「……かならず奴らを倒し、おまえらの仇をとってやる。そして、そのために必要なのは、こいつだ……！」

コジロウが見た方には、黒く、巨大なロボットが横たわっていた……！！

· ^UJ·

ムサシルート13話「ニヤース危機一髪!？」（前書き）

ムサシ「ていうか、なんでこの物語、こんなにホモネタあちこちに含んでるわけ？」

カティア「さあ… ゲームフオークさんへの皮肉なんじゃないですか？」

メルア「いや、違いますから。」

ムサシルート13話「ニヤース危機一髪!？」

ムサシ「ニヤース! いたら返事なさい! 顔面一発殴ったげるから!！」

カティア「ニヤースさん!」

メルア「ニヤースさあ〜ん!！」

ムサシは、森の中をニヤースを探しながら歩いていた。ムサシ一人では心配だからと、カティアとメルアも同行していた。

メルア「全然みつからないです…。」

ムサシ「あのバカ…。どこほつつき歩いてんのよ……。」

カティア「ムサシさん…。」

ムサシは一見、キツイことを言っているようにもみえるが、内心ではかなりニヤースのことを気にかけていた。

ムサシにとって、ニヤースは仲間であり、家族のようなものでもあった。

メルア「気を落とさないで、ムサシさん！ ニヤースさんならきつと、見つかります！」

ムサシ「ありがとう、メルア……」

ムサシは頷いたが、明らかにいつもの勢いは感じられない。

カティア（なにか…なにか、手がかりはないかしら？ ……ん？）

あたりを見回したカティアは、暗がりから何かを見つけ、それを拾い上げた。

カティア「これ、食べかけのキノコ…？」

ムサシ「…！ この菌型、ニヤースのものよ！」

メルア「ニヤースさん、この辺りにいるんですよ、きっと！」

ムサシ「探しましょ！ もっとくまなく！」

ムサシは勢いを取り戻し、駆け出した。
カティアとメルアも、それに続いた。

しばらく探していると、小さな陰が視界に入ってきた。間違いない、ニヤースだ！

ムサシ「ニヤース…!!！」

ムサシの声に、ニヤースが振り向いた。

…が、様子がおかしい。

ニヤース「ふふふ、ふふふふふふふふふへへへへへへへへ…!!！」

ムサシ「ニ、ニヤース…!!？ どうしたの…!!！」

カティア「笑ってる……?」

メルア「こ、この笑い方、昼間の!」

メルアは、今日の昼間に会った山男のことを思いだした。

ムサシ「カティア! さっきのキノコ、あなたまだ持ってる!」

カティア「は、はい! 一応拾っておきました!」

カティアが慌ててキノコを差し出す。

ムサシ「このキノコ、前に図鑑で見たことあると思ったのよ……!」

メルア「ど、どんなキノコなんですか!」

ムサシ「これはおそらく、食べたら笑いが止まらなくなってしまつ
毒キノコ、『ワライダケ』よ……!」

不意に、物陰から山男が現れた！

山男「はははははははははははははははは！！」

カティア「なっ…！」

ムサシ「この糞忙しい時に！」

ニヤース「ニヤハハハハハハハハハハ！」

山男「ふはははははははははははははははは！！」

ムサシ・カティア・メルア（なんてうざったい不協和音だよ……。）

ムサシ「…とにかく、早くこのつらさを治して、黙らせましょー！」

カティア「でも、どうやって治すんですか？」

ムサシ「確か、ワライダケの毒を消すには、『シラケダケ』を食べさせればいいはずよ。」

メルアがわからないと言った顔をする。

メルア「シラケダケですか……。あまり聞かないですね。」

ムサシ「そのはずよ。シラケダケは、動物で言ったら絶滅危惧種みたいなものだから。簡単には見つからないわ。」

カティア「えーっ！？ どうすんですかー!!」

カティアが困惑し、叫ぶ。

ムサシ「探すしかないわ……！ こいつらが笑い死にする前にね……！」

メルア「はい……！ 急いで手分けして探しましょう！」

カティア「ここで待っていて下さい、二人とも。 かならず、シラケダケを見つけて来ます。」

ムサシ達は、それぞれシラケダケを探しはじめた。

ムサシはとりあえず、今来た道を入念に探しはじめた。

シラケダケは、その性質上さっきのワライダケの近くに生えているだろうと考えたのだ。

ムサシ「なかなか無いわね…。」

しばらく行くと、目の前によく切れそうな細い木があった。

ムサシ「この木の向こう側…、怪しいわ。」

ムサシはおもむろに構えをとった。

ムサシ「はあああ……、いあいぎりいいいいッ…」

バキッ！

ムサシの手によって、細い木は切り刻まれた。

ムサシ「楽勝、楽勝。」

ムサシは、何事も無かったかのように前に進むと、視界に人影をとらえた。

ムサシ「誰なの…?」

オヤジ「やあやあ、金のたまおじさんだよ。」

ムサシ「……………は?」

オヤジ「やっぱり、金のたまは2個なくちゃね。はい。」

オヤジがムサシにふたつの金のたまを渡してくれた。そして、足早に去っていった。

ムサシ「?? へ? え?」

あとに残されたのは、呆然と金のたまをもって立ち尽くすムサシだ

けであった。

ムサシ「あ、あの猥褻オヤジが…！」

…私は…。」

ムサシ「私は、金の玉じゃなくてキノコがほしいのよおーッ！！」

ムサシは絶叫した。

その頃カティアは、別れ際にムサシに見せてもらったシラケダケの画像の記憶を頼りに探していた。

カティア「なかなかないわ……。」

さすがのカティアも疲れてしまい、少しだけ休もうと側の木にもたれかけた。

カティア「……大体、シラケダケなんてあるのかしら？　もし、見

つけられなかったら……。」

カティアはニヤースが笑えばなしのまま旅を続けるのを想像し、思わず首を振る。

カティア「それだけは絶対に阻止する!!!!!!」

カティアは再び走りだした。

その頃のメルア。

メルア「キノコキノコ……」

数時間後。

ムサシ、カティア、メルアが残念そうな顔をして、ニヤースと山男のもとに戻ってきた。

ムサシ「なかつたわね……」

カティア・メルア「はい……」

ニヤース「ニヤハハハハ……」

山男「フハハ……フハ……フハハ……」

ニヤースも山男も、明らかに疲弊していた。

ムサシ「こうなったら……！」

ムサシは、モンスターボールを投げ、アーボを繰り出した。

ムサシ「アーボ、ニヤースにまきつく！」

カティア「ム、ムサシさん!？」

メルア「何を!!！」

カティアとメルアが止めに入ろうとしたが、既にアーボはニヤースにまきつき、ダメージを与え始めていた。

ニヤース「……ッ!」ガクッ

ニヤースは力尽き、瀕死状態になった。

カティア「ひどい……。なんてことを……」

メルア「ムサシさん、貴女は……。」

カティア達は、ムサシがニヤースが使い物にならなくなったから始末したのだと思った。

しかし、ムサシは冷静であった。

ムサシ「今ね。 げんきのかたまり！」

ムサシがげんきのかたまりをニヤースにかざすと、ニヤースの体力は一気に回復した！

ニヤース「お、おおお！ 笑いが止まった！ 止まったニヤース！」

ムサシ「作戦通り、ね。」

カティア「そうか…！ 一旦瀕死に持ち込んで、状態異常を無くしたんですね。」

ムサシ「ええ。 ワライダケの毒には、なんでもなおしも効果が無かったし、これしか手は無かった。」

メルア「驚かささないでくださいよう…。」

カティアもメルアも、胸を撫で下ろした。

ニヤース「でも、それなら最初からそうしてくれても……」

ムサシ「このスカポントン！ げんきのかたまりがもったいないでしょーが！」

ニヤース「ニヤー……」 しょぼん

ムサシ（でも……本当の理由は、あまりニヤースを傷つけないかったからなのよね。）

山男「ふはははははは……（あれ？ 俺のことは……？）」

夜明け

ムサシ達は、四人そろって眠そうな顔をして朝日を眺めていた。

ムサシ「ふあゝあ… 結局、夕食もとれず、一睡もしないまま、朝になっちゃったわね。」

メルア（よかった。 マトマの激辛スープ、食べずに済んで……）
フウ…

カティア「シオンタウンも近くですし、一気に行きましょうか。」

ムサシ「そうね。 とにかく、着いたら食事ね。」

メルア（…よかった。 夜のシオンタウンじゃなくって。 夜のポケモンタワーとか……）ブルブル

ニヤース「ほら！ さ、さっさと行くのニヤ！」プンスカ！

ムサシ「あらあら、何キしてんのよニヤース？（笑）」

そんなこんなで、なんとかムサシ達は無事にシオンタウンへと歩き始めた。

…と、木陰から何者かがその姿を見つめていた。

????「へえ、あれが、ジュアームの言っていた、イレギュラー達ですわね。」

その女は腰にレイピアを装備し、その外観は中世の騎士を連想させる。

??? 「あの女と猫、かなり信頼しあっているわね。 ふふ、そういうの、壊したくなるのよね……」

そいつは可笑しそうに笑うと、表情をきつく変えた。

フー＝ルー「このフー＝ルー、直々に相手つかまつる……!!」

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3269t/>

カルヴィナ・クエスト

2011年11月16日21時45分発行